

一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県気高郡青谷町

長谷古墳群 長和瀬谷田遺跡

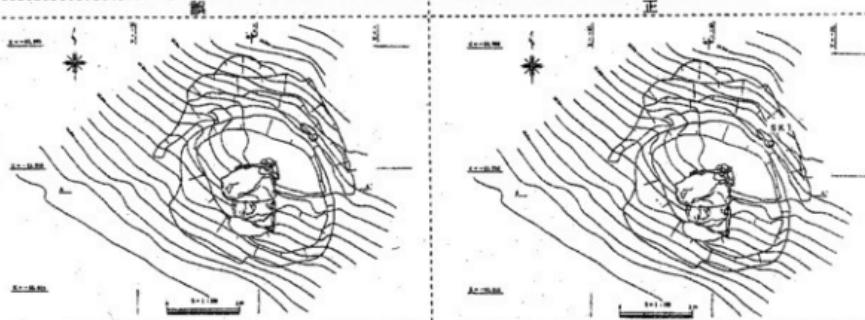
2000

財団法人 鳥取県教育文化財団
建設省 鳥取工事事務所

正三 青谷 遺跡

お手数ですが、以下のとおり訂正のうえ、ご活用下さい。

1 ページ	例言	6
誤	遺物写真は調査員が撮影したが、遺物写真的撮影は、奈良国立文化財研究所の牛嶋茂、杉本和樹の両氏にお願いした。	正
正	遺物写真及び長谷古墳群の遺物写真是調査員が撮影したが、長和瀬谷田遺跡の遺物写真は奈良国立文化財研究所の牛嶋茂、杉本和樹の両氏にお願いした。	
1 3 ページ	下から 3 行目	
誤	東から 2, 3 番目	正
正	東から 5 番目	
1 8 ページ	2, 7 行目	
誤	神図 7 の	正
正	神図 11 の	
1 8 ページ	3, 7 行目	
誤	神図 7 の	正
正	神図 11 の	
2 3 ページ	2, 4 行目	
誤	第 1, 4 図の	正
正	第 1, 5 図の	
2 4 ページ	挿図 1 3	



2 8 ページ	5 行目	
誤	TK 2 1, 7 並行期	正
正	TK 2 1, 7 併行期	
2 8 ページ	8 行目	
誤	土師器裏も含めて、SK	正
正	土師器裏も含めて、SX	
2 8 ページ	8 行目	
誤	神図 1, 0 の	正
正	神図 11 の	
図版 1 上段	キャプション	
誤	長谷 1 号墳 検出状況 (南から)	正
正	長谷 1 号墳 検出状況 (東から)	
図版 1 下段	キャプション	
誤	長谷 1 号墳 石室検出状況 (東から)	正
正	長谷 1 号墳 石室検出状況 (南から)	

一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県気高郡青谷町

長 谷 古 墳 群
長 和 濑 谷 田 遺 跡

2000

財団法人 鳥取県教育文化財団
建設省 鳥取工事事務所

序

鳥取県は北は日本海に臨み、南は中国山地によって山陽地方と画されています。県域は東西に長く、その大部分を山間地が占めていますが、日本海沿いには中国山地から急激に流れ下る河川によって運ばれた大量の土砂によって形成された平野部が存在しております。県民の活動域はこの平野部を中心となっており、道路や鉄道などの交通網も平野部を東西方向に延びるルートが主要なものであり、整備も進められているところです。

一般国道9号は山陰地方の産業、経済活動における大動脈であるとともに、文化交流を促進する上でも欠くことの出来ない道路であり、より一層の高速化を含めた整備が望まれているところですが、整備の一環として将来の国土開発幹線道路となる高規格の自動車専用道路が建設されることになり、建設工事に先立って遺跡の発掘調査が順次実施されております。

一般国道9号（青谷・羽合道路）の道路改築事業についても、建設省の委託を受けた財団法人鳥取県教育文化財団では、青谷町内に於いて平成10年度には「ながたに長谷1号墳・7号墳」を、平成11年度に「長和瀬谷田遺跡」を記録保存するためにそれぞれ発掘調査いたしました。

これらの遺跡は、同じ青谷町内で平成10年度から発掘調査が実施されている「青谷上寺地遺跡」と、平成8年度以降に当財団が調査を実施した泊村内の遺跡の間に存在しており、当該地域の歴史を解き明かしていく上で必要な新たな情報を提供できたと考えています。

本報告書は、これらの発掘調査の成果に学術的な考察を加え、記録として保存するためにまとめたものです。本報告書が、埋蔵文化財に対する認識と理解を深める一助となり、教育及び学術研究のために広く活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に際しまして、多大な御理解と御協力をいただいた地元の方々をはじめとする関係各位に対し、心から感謝すると共に厚くお礼を申し上げます。

平成12年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有田 博充

序 文

建設省が直接管理する一般国道9号は、京都市を起点として福知山市を経由し、がくじやまし、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、益田市から中国山地を越えて山口市、下関市に至る総延長約671kmの幹線道路であり、西日本の産業・経済活動の大動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省鳥取工事事務所では、岩美郡岩美町（鳥取・兵庫県境）から氣高郡青谷町までの約48.5kmを管理しており、広域交流を進める道づくり、暮らしを豊かにする道づくりなど各種の道路整備事業を実施しています。その一つとして、環日本海交流の基幹軸の一環を担う高規格幹線道路（自動車専用道路）の一部である青谷羽合道路の整備を銳意進めているところです。

青谷羽合道路は、気高郡青谷町から東伯郡羽合町にかけての多種多様な交通による混雑や峠部の冬季交通障害の解消、安全で円滑な交通の確保のほか、機能分担として災害時の緊急輸送路の代替路線確保を目的として計画され、昭和61年度から事業に着手し、今年度は土地改良工事及び橋梁工事を促進しています。

このルート上には、多数の「周知の埋蔵文化財包蔵地」がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁へ通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

このうち平成10年度は「長谷1・7号墳」、平成11年度には「長和瀬谷田遺跡」の2遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもと発掘調査が行われました。

本書はこの調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることを理解いただけることと期待するものであります。

終わりに、事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまでご尽力いただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位に対し心から感謝申し上げます。

平成12年3月

建設省中国地方建設局

鳥取工事事務所長 中島英一郎

例　　言

1. 本報告書は、一般国道9号（青谷・羽合道路）の道路改築工事に伴い、1998（平成10）年度に調査を実施した長谷古墳群に属する長谷1号墳（気高郡青谷町大字長和瀬字岩ヶ口592番地6）と長谷7号墳（大字長和瀬字上水無瀬975番地1）、1999（平成11）年度に調査を実施した気高郡青谷町大字長和瀬字谷田240番4に所在する長和瀬谷田遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 発掘調査の実施に当たり、長谷古墳群においては、古墳主軸を基準に任意に調査区を4分割し、業者委託で基準点の設定を行った。長和瀬谷田遺跡では基準点及び方眼測量業務を測量業者に委託した。
3. 長谷古墳群、長和瀬谷田遺跡ともに国土座標第V系に基づく座標表示を行う。長和瀬谷田遺跡では調査地に10m方眼のグリッドを設定し、南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字で表示しグリッド名とした。共に方位は国土座標第V系に基づく座標北、レベルは海拔標高である。
4. 本報告書に記載した周辺遺跡分布図には国土地理院発行の5万分の1地形図「青谷」（平成6年修正版）、「倉吉」（平成6年修正版）、「鳥取北部」（平成元年修正版）及び「鳥取南部」（平成元年修正版）を使用した。
5. 本報告書の作成は調査員の討議に基づく。本文は各遺跡の調査員が分担して執筆し目次に執筆者を記載した。遺構、遺物の実測並びに写真は調査員を中心に実施した。各遺跡の編集は各年度の調査員が行った。
6. 遺構写真は調査員が撮影したが、遺物写真的撮影は、奈良国立文化財研究所の牛鶴茂、杉本和樹の両氏にお願いした。
7. 出土遺物、図面、写真等は鳥取県埋蔵文化財センターが保管している。
8. 現地調査および報告書作成にあたっては、下記の方々に指導・協力を頂いた。記して感謝いたします。

井上 貴央　赤木 三郎

凡　　例

1. 出土遺物にネーミングした遺跡名は下記の略称を用いた。
長谷1号墳：NG 1　　長谷7号墳：NG 7　　長和瀬谷田遺跡：ナゴセ
2. 本報告書における遺構記号は下記のように表す。
S K：土坑　　S D：溝状遺構　　S X：古墓・不明遺構　　P：柱穴・ピット
3. 長和瀬谷田遺跡報告における遺物記号は下記のように表す。
Po：上器・土製品　　S：石製品　　F：鉄製品　　W：木製品
4. 遺物実測図中における記号は以下のとおりとする。
←←←：ケズリの方向（砂粒の動き）……………：擦り面　……………：敲打面
ト---ト：擦り範囲　|---|：敲打範囲
5. 遺物観察表の法量欄の丸数字は下記の意味で、数値の前につけた※は復元値、△は残存値であることを表す。
①口径　②器高　③底部径　④脚径　⑤長さ　⑥幅　⑦厚さ
6. 長和瀬谷田遺跡報告における遺物観察表の色調欄の記述は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版「標準土色帖」1994年版に基づく。
7. 遺物観察表の備考欄に記載した長谷古墳群の「山根13」長和瀬谷田遺跡の「清水-1」等の番号は実測者番号であり、シールに番号を記載して遺物個体ごとに貼り付け、遺物の特定ができるようにしてある。

目 次

序
序文
例言
凡例
目次
挿図目次
挿表目次

第1章 調査の経緯	西川
第1節 発掘調査に至る経緯.....	1
第2節 調査体制.....	2
第2章 位置と環境	西川・手島
第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	5
第3章 長谷古墳群の調査	北浦・鬼頭
第1節 調査の概要.....	11
第2節 位置と環境.....	11
第3節 調査の経過と方法.....	11
第4節 長谷1号墳.....	13
第5節 長谷7号墳.....	23
第6節 小結.....	27
第4章 長和瀬谷田遺跡の調査	西川・手島
第1節 調査の概要.....	29
第2節 調査の経過と方法.....	30
第3節 遺構外の遺物.....	31

図版
報告書抄録

挿図目次

挿図1 遺跡周辺地形図.....	5	挿図15 長谷7号墳土層断面図.....	25
挿図2 周辺遺跡分布図.....	10	挿図16 長谷7号墳石室実測図.....	26
【長谷古墳群】		挿図17 S K I 実測図.....	27
挿図3 周辺古墳分布図.....	12	【長和瀬谷田遺跡】	
挿図4 長谷古墳群分布図.....	13	挿図18 長和瀬谷田遺跡調査前地形測量図.....	29
挿図5 長谷1号墳調査前測量図.....	14	挿図19 長和瀬谷田遺跡調査後地形測量図.....	29
挿図6 長谷1号墳調査後測量図.....	14	挿図20 谷状部南北土層断面図.....	30
挿図7 長谷1号墳上層断面図.....	15	挿図21 谷状部東西土層断面図.....	30
挿図8 長谷1号墳石室実測図(1).....	16	挿図22 遺物出土位置図.....	31
挿図9 長谷1号墳石室実測図(2).....	17	挿図23 遺構外出土遺物実測図I.....	32
挿図10 古墓遺物出土状況図.....	19	挿図24 遺構外出土遺物実測図II.....	33
挿図11 長谷1号墳出土遺物実測図.....	20	挿図25 遺構外出土遺物実測図III.....	34
挿図12 長谷7号墳調査前墳丘測量図.....	22	挿図26 遺構外出土遺物実測図IV.....	35
挿図13 長谷7号墳墳丘地形測量図.....	24	挿図27 遺構外出土遺物実測図V.....	36
挿図14 長谷7号墳墳丘除去後測量図.....	24		

挿表目次

【長谷古墳群】

挿表1 長谷1号墳出土遺物観察表.....	21
-----------------------	----

【長和瀬谷田遺跡】

挿表2 遺構外出土土器・土製品観察表…	32～35
挿表3 遺構外出土石製品観察表…	36
挿表4 遺構外出土木製品観察表…	36

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

地域間交流を促進するためには、情報通信網と交通網を整備して高速化をはかることが欠かせない。情報通信網の整備は近年急速に進みつつあり、情報化社会の到来が叫ばれている。しかし、交通網の整備は容易でなく、完成までには長い時間と多額の費用が必要であり、一朝一夕には成し遂げることはできないのが実状である。

京都市から福知山市を経て鳥取県・島根県の日本海沿いを西走し、山口市を経由して下関市へ続いている一般国道9号は4府県の府県庁所在地を繋いでおり、山陰地方にとって無くてはならない幹線道路である。しかし、中国山地から伸びる丘陵が日本海際まで迫っている所も多い鳥取県では、尾根や谷筋を道路が横断することになるうえに、古くからの道に由来する道路は地形に制約されているためにカーブが多く、現在求められている高速化には適していない。そのため、高速化に対応した道路が新たに計画され建設が進められている。鳥取県東部から中部にかけて的一般国道9号の青谷・羽合道路は気高郡青谷町青谷のインターチェンジから東伯郡泊村原のインターチェンジを経由して東伯郡羽合町長瀬のインターチェンジに続く将来の国土開発幹線道路となる高規格の自動車専用道路である。このうち、青谷町青谷から泊村原のインターチェンジ間15.6kmの区間も、古くから遺跡の存在が知られていた地域であり、工事に先立って当該する町村の教育委員会が国及び県の補助金を得て試掘調査を行った。その結果、遺跡の所在が明らかとなった箇所については用地買収を待って、平成8年度から財團法人鳥取県教育文化財団(以下、財団)によって発掘調査が順次実施されている。平成8年度には石鷲第3遺跡(森末地区)、寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡、平成9年度には石鷲第1遺跡、石鷲第3遺跡(操り地区)、小浜ワラ畠遺跡、小浜小谷遺跡、池ノ谷第2遺跡が調査され、鳥取県教育文化財団調査報告書54『石鷲第3遺跡(森末地区・操り地区)・石鷲8・9号墳・寺戸第1遺跡・寺戸第2遺跡・石鷲第1遺跡』、同55『小浜ワラ畠遺跡・小浜小谷遺跡・池ノ谷第2遺跡』としてすでに報告書が公刊されている。

平成10年度以降についても、平成10年度に園第6遺跡、青谷上寺地遺跡、長谷1号墳、長谷7号墳、平成11年度は長和瀬谷田遺跡、青谷上寺地遺跡が調査された。園第6遺跡については、鳥取県教育文化財団調査報告書61『長瀬高浜遺跡Ⅶ・園第6遺跡』として報告書が公刊されており、青谷上寺地遺跡についても、同67『青谷上寺地遺跡1』、同68『青谷上寺地遺跡2』が平成11年度末に刊行される。

青谷町長瀬地内では古くから古墳の存在や土器等の散布が確認されており、昭和63年に農免農道新設工事に伴って長谷古墳群で古墳の調査が実施されており、平成5年1月に長和瀬漁業集落環境整備事業に伴って青谷町教育委員会が実施した長和瀬谷田所在遺跡の試掘調査においても、遺構は確認されなかつたが上器が出土していた。そのため、周囲に遺跡が存在することが推測されていた。一般国道9号(青谷・羽合道路)改築工事に伴って、平成4年2月に鳥取県埋蔵文化財センターが実施した事前踏査によって、改めて古墳や遺物散布の存在が明白となった。そのため、青谷町教育委員会によって平成6年2月に長谷古墳群域内、平成8年3月には長和瀬字谷田地内で試掘調査が実施された。その結果、遺跡の存在が明らかとなつたため関係機関との取扱いについて協議を重ねた上で、建設省中国地方建設局長(以下、建設省)から文化庁長官に対し文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知が提出された。発掘調査の指示を得た建設省は鳥取県教育委員会とさらに協議を行い、発掘調査を財団に委託することとした。建設省から発掘調査を受託した財団は、鳥取県埋蔵文化財センター所長が文化財保護法第57条第1項に基づいて文化庁長官に発掘調査の実施を届け出た上で、平成10年度に東部埋蔵文化財青谷調査事務所、平成11年度には中部埋蔵文化財北条調査事務所泊分室に共に2名の担当調査員を配置し、平成10年度に長谷1号墳・7号墳、平成11年度には長和瀬谷田所在遺跡の調査を実施することになった。

『青谷町内遺跡発掘調査報告書II』—長和瀬谷田所在遺跡試掘調査— 青谷町教育委員会 1993

『青谷町内遺跡発掘調査報告書III』—長谷古墳群— 青谷町教育委員会 1994

『青谷町内遺跡発掘調査報告書VI』—長和瀬谷田所在遺跡・長谷古墳群— 青谷町教育委員会 1997

第2節 調査体制

【平成10年度】

○調査主体 財團法人鳥取県教育文化財団

理事長 田淵 康允（鳥取県教育長）
常務理事 大和谷 朝（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長 岡山 宏徳

財團法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター

所長 古井 喜紀（鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次長 八木谷 異
調整係長 桜田 謙
調査員 小谷 修一（4～6月、退職）
主任事務職員 矢部 美恵
事務職員 小林 順子

○調査担当 財團法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター

東部埋蔵文化財青谷調査事務所

所長 岡田 寿晃
主任調査員 北浦 弘人
調査員 鬼頭 紀子
整理員 山根 都

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力 青谷町教育委員会

下記の方々に、発掘作業又は整理作業に従事ないし協力をいただいた。

伊藤 紀子	釜谷 久雄	歳光 寿栄雄	黒田 光子
鯨口 勝信	鈴木 栄美	田中 紀美雄	谷川 瑞
谷口 寿治	山村 和夫	樋 多喜雄	富山 香織
野島 尚子	原田 ひとみ	細川 正明	樹添 敏雄
山本 久美恵	（敬称略、五十音順）		

【平成11年度】

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	有田 博 充 (鳥取県教育長)
常務理事	大和谷 朝 (鳥取県教育委員会事務局次長)
事務局長	岡山 宏徳

財団法人鳥取県教育文化財団	鳥取県埋蔵文化財センター
所長	古井 喜紀 (鳥取県埋蔵文化財センター所長)
次長	八木谷 昇
調整係長	松田 肇
文化財主事	高垣 陽子
主任事務職員	矢部 美恵
事務職員	小林 順子

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター

中部埋蔵文化財北条調査事務所泊分室

所長	更田 恰治
主任調査員	西川 敷
調査員	手島 尚樹

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力 青谷町教育委員会

泊村教育委員会

下記の方々に、発掘作業又は整理作業に従事ないし協力をいただいた。

尾川 美佐子	加嶋 三枝子	加嶋 義則	河口 智津子	桜井 敏夫
嶋崎 アツ子	鷗崎 则子	嶋崎 久子	清水 房子	厨子 彰子
陶山 富江	谷本 登	谷本 美智恵	中村 まさゑ	西本 てる子
野島 尚子	福田 弥千代	松井 久雄	松田 アイ子	松田 澄子
松田 正己	松田 八重子	森 信季	山下 清範	山田 啓美

(敬称略、五十音順)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

鳥取県

鳥取県は、島根県・岡山県・広島県や山口県と共に中国地方を形成する。東は兵庫県、西は島根県、南は岡山県・広島県とそれぞれ接し、北は日本海に面している。中国地方は、標高1200mを越える山々を擁する中国山地を隔てて、瀬戸内海に面する山陽地方と、日本海に面する山陰地方に分けられ、鳥取県は島根県と共に山陰地方に位置している。

鳥取県は、東西約126km、南北約62km、面積約3,507km²である。県内は、鳥取市周辺を中心とする東部地域、倉吉市周辺を中心とする中部地域、米子市・境港市周辺を中心とする西部地域に大きく分けられる。各地域とも地勢は山がちであり、山地が県総面積の86.3%を占める。それぞれの地域には、県下を代表する三大河川である千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）が流れ、その下流域には、鳥取平野（東部）、倉吉・北条・羽合平野（中部）、米子平野（西部）が形成されている。各平野の海岸線には、全国的に有名な鳥取砂丘はじめとして、河川によって運ばれた多量の砂により大小の砂丘・砂州が発達している。

人々の生活領域は、山間の谷奥平野と海岸に開けた沖積平原に展開している。千代川下流域には、江戸時代に鳥取池田藩主十二万五千石の城下町として発展し、現在は県庁所在地である鳥取市が位置する。その南東側にはかつての律令時代には「因幡國」の国府が置かれていた国府町が位置している。天神川中流域には、かつての律令時代には「伯耆国」の国府が置かれていた倉吉市が位置している。日野川下流域には、「山陰の商都」と呼ばれる商業の町として発展してきた米子市が位置し、現在も交通の要所として発展している。米子市の北西に延びる宍道湖半島の突端部には、国内有数の漁業基地である境港市が位置している。

現在鳥取県は、前述した4市を中心として39市町村により構成されている。人口は、614,733人（平成12年3月1日現在）と47都道府県で最少であるが、自然の多い美しい景観を残している。

青谷町

気高郡青谷町は旧因幡國の西端に位置し、後述する泊村との町村境は旧の国境に相当する。町域は東西約7.7km、南北約13km、面積約68.2km²を測る。東は気高郡高町及び龍野町、西は東伯郡泊村・東郷町、南は三朝町に接し、北は日本海に面している。町の南域には標高500mを越える山が位置し、そこから北に伸びる溶岩台地が開析されて分岐した尾根が町の東西を取り囲むように町境を形成している。溶岩台地の北端は長尾鼻と呼ばれる岬に続き、30mを越える断崖となって日本海に突出している。また、町の中央を南北に伸びる溶岩台地の東を日置川、西を勝浦川が流下し、河口近くで合流して日本海に注いでいる。合流地点付近には沖積平野が形成されているが、上・中流域は急流であり狭い谷底平野が開けているに過ぎない。しかし、古くから三稜や椿の栽培が行われており、因州和紙の産地として有名である。海岸部には砂丘が形成されている。人口は8,532人（平成2年月29日現在）である。

調査地

長谷古墳群は青谷町西端近くを流れる長和瀬川河口にある長和瀬集落が位置する谷瀬とは集落東側にある尾根を隔てた狭い谷部の西側斜面幅付近に存在する。16基の古墳が確認されている。

長和瀬古田遺跡は、青谷町西端近くを流れる長和瀬川河口にある長和瀬集落から南に延びる狭い谷部内にあり、泊村との町境をなす丘陵裾部が長和瀬川に向けて弱く張り出す尾根に挟まれてやや奥まった所に位置する。平成9年度に調査の実施された池ノ谷第2遺跡は東隣の丘陵上にある。



挿図1 遺跡周辺地形図

第2節 歴史的環境

鳥取県内では遺構を伴う確実な旧石器時代の遺跡は確認されていないが、大山山麓を中心に旧石器がいくつか見つかっている。県中部域では、関金町野津第三第1遺跡で黒曜石製の縦長剥片のナイフ型石器と安山岩質製の横長剥片のナイフ型石器などが見つかっている。また、倉吉市内では中尾遺跡で黒曜石製・安山岩質製のナイフ型石器、安山岩質製の削器、長谷遺跡で安山岩質製のナイフ型石器、和田では石刃、上神51号墳・高鼻2号墳からは細石刃石核、横谷遺跡群でナイフ形石器や楔形石器が出土している。青谷町・泊村内では旧石器時代の遺物は見つかっていないが、気高町には、詳細な出土地点は不明であるが八束水の砂丘で採集されたと伝えられる黒曜石やチャートなどを材料とするナイフ型石器や槍先形尖頭器および有舌尖頭器が存在する。

縄文時代草創期の土器の出土例はないが、大山山麓でこの時期の石器類がいくつか確認されている。遺跡周辺では、関金町菅ヶ平・伝大栄町鶴波などで押型文土器と共に堅穴住居跡では、関金町菅ヶ平・伝大栄町鶴波などで有舌尖頭器、倉吉市長谷遺跡で尖頭器が見つかっている。

早期になると丘陵・台地上で遺跡が確認されるようになり、倉吉市取木遺跡では押型文土器と共に堅穴住居跡や屋外炉跡が見つかっている。また、羽町町の南谷19号墳の墳丘下から安山岩質製のスクレイバーが出土している。その他、倉吉市中田遺跡・野口遺跡・東伯町大法3号墳などで上器や石器が出土している。泊村の原第2遺跡からは早期末から前期のものと考えられる土器を伴う土坑が見つかり、鹿野町の柄杓目遺跡からは押型文土器が出土している。

前期になると青谷町では蔵内上長谷第2所在遺跡で土器が出土している。泊村内では当該期の遺構・遺物は確認されていないが、北条町の島遺跡では、前期～晚期の土器や石器・丸木船・貝塚などが出土している。

中期は遺跡の密度が少なく、青谷町では青谷第1遺跡で上器が出土している程度である。泊村内では当該期の遺構・遺物は確認されていない。しかし、気高町八束水の短尾付近では中期の特徴をもつ土器などが出土したといわれる。

後期になると青谷町では蔵内上長谷第4所在遺跡で土器が出土している。泊村内では当該期の遺構・遺物は確認されていない。中部域では倉吉市津田峰遺跡・関金町横峯遺跡などで、中央に石組の炉を持つ住居跡が見つかっている。また、東郷町北福第3遺跡などでは磨削繩文土器などが表採されている。鹿野町の柄杓目遺跡では溝状遺構が確認されている。

晩期の遺跡では、青谷町の青谷上寺地遺跡で土器が出土しており、泊村宮の山遺跡では縄文時代晩期の土器とともに右鍾などの石器類が出土している。中部域では倉吉市松ヶ坪遺跡で配石墓や土器棺墓が検出され、羽町町長瀬高浜遺跡では突宍文土器などが出土している。鹿野町の柄杓目遺跡からは土坑が確認されている。

鳥取県内にも弥生時代の早い段階に稻作文化が伝播したと考えられ、米子市久美遺跡では弥生時代前期の水田跡が確認されている。青谷町では当該期の遺構・遺物は確認されていない。泊村では石脇字前田から前期末から中期初め頃のものと推測される磨製石剣が子持勾玉と共に出土している。県中部域では、長瀬高浜遺跡で他地域に先行して集落が成立し、全国的にも古い時期の玉作工房跡や土壙墓などが見つかっており、倉吉市イキス遺跡と共に木葉文が描かれた土器も多く出土している。

中期では、青谷町の青谷上寺地遺跡が特筆される。遺跡は低湿地に位置するため遺物の遺存状況が良く、弥生時代の人骨が出土した土壙墓や祭祀関連遺構、多量の土器や石器、木製品や金属製品などの弥生時代中期から古墳時代前期を中心とする遺物が出土している。泊村内では小浜ワラ畑遺跡に堅穴住居が作られている。中部域では長瀬高浜遺跡に土壙墓がわずかに存在する以外に現在のところ東郷池周辺で遺跡は見つかっていないが、この時期の遺跡は天神川を源たる丘陵や台地上にあり、羽町町宇野第5遺跡では土器が見つかっており、倉吉市後中尾遺跡には環濠集落が営まれている。

後期には青谷町カヤマ遺跡や鹿野町の柄杓目遺跡・泊村の宇野第1遺跡や寺戸第2遺跡・石脇第1遺跡・石脇第3遺跡森末地区などでも堅穴住居跡が見つかっている。また、園西川遺跡では土坑が出土している。東郷池周辺では遺跡が丘陵上に集中し、泊村宇野第1遺跡・羽町町南谷ヒジリ遺跡や南谷大山遺跡・倉吉市福庭遺跡など

の多くの遺跡で竪穴住居跡を中心とする集落が調査されている。しかし、低地では羽合町和助北遺跡で赤色塗彩された脚付注口土器が見つかっている程度である。墳墓では木棺墓や土壙墓などの集団墓から卓越した埴丘墓が出現し、倉吉市阿弥大寺1～3号埴丘墓、藤和埴丘墓、東郷町宮内1号埴丘墓などは四隅突出型埴丘墓と呼ばれる特異な形態を呈している。また、県中部域では銅鐸の出土例が多く、青谷町青谷上寺地遺跡で破片が3点（実録錫式段階）見つかり、泊村池・谷第2遺跡でも青銅の舌を2本伴って1口（外縁付鉢I式）出土している。また、倉吉市小田で2口（外縁付鉢II式・扁平錫式）、北条町米里で1口（外縁付錫式）、東伯町八橋でも1口（外縁付錫I式）の銅鐸が見つかっており、東郷町北福第1遺跡・羽合町長瀬高浜遺跡からは小銅鐸が1口ずつ出土している。

古墳時代前期の東郷湖周辺は、橘津古墳群（馬ノ山古墳群）・長瀬高浜古墳群をはじめとして、県下でも有数の古墳密集地である。主な前期古墳には、復元全長100mを測る前方後円墳である橘津（馬ノ山）4号墳があり、三角縁神獣鏡を含む多数の副葬品が出土している。泊村には、全長33mと小規模ではあるが前方後円墳の石脇2号墳（尾尻古墳）があり、彷彿斜線獸帶鏡が1面出土している。長瀬高浜遺跡では、古墳時代前期に230棟ほどの竪穴住居、45棟の掘立柱建物を持つ大集落が出現する。この集落は中期中頃にはその規模が縮小し、集落廃絶後は古墳時代後期まで古墳が築造される。

中期には東郷池東岸には全長95mに復元される宮内孤塚古墳、南岸には全長110mの野花北山1号墳などの県内でも最大規模の前方後円墳が築造されており、古墳時代前期から中期にかけて東郷池周辺が東伯者の中心地であったことが分かる。この時期の集落としては宇谷第1遺跡で中期前葉～中葉、南谷大山遺跡で中期後半の竪穴住居跡が見つかっている。

後期になると大型前方後円墳は姿を消して小規模な古墳が盛んに築造され、群集墳を形成するようになる。また、從来の竪穴系の埋葬施設に代わり横穴式石室が導入されて主流となっていく。泊村には全長約33mの前方後円墳の石脇8号墳が築かれ、計7基が調査されている國古墳群、宇谷古墳群や石脇古墳群などの扁平板石組石室を持つものも知られている。青谷町では全長約34mの前方後円墳である長尾鼻1号墳を有する長尾鼻古墳群、全長28mの前方後円墳の東山古墳（青谷2号墳）、全長約24mの前方後円墳の阿古山2号墳や線刻壁画が残る阿古山22号墳を有する阿古山古墳群、義郷古墳群や鷺谷古墳群、100基以上の古墳が存在し船の縁刻壁画が見つかった吉川43号墳を有する吉川古墳群、今回1号墳と7号墳が調査された長谷古墳群などの多くの古墳群が存在している。鹿野町には径19mの円墳の神越谷9号墳、前方後円墳では全長約20mの重山9号墳や全長約23mの出百姓13号墳などがある。気高町では全長約47mの前方後方墳の西山古墳や全長29mの双方中円墳とされる沢見塚古墳、線刻壁画をもつ豊達11号墳や殿25号墳などが知られており、古墳の遺物としては類例の少ない綱範が勝見で出土している。横穴墓は鹿野町に西中郷横穴群などがあるが、多くは未調査で詳細は不明である。古墳以外では東郷町の頃見中ノ谷古墳群が挙げられる。6世紀前葉の窯跡でこの地域で須恵器を生産したことが分かる数少ない遺跡の一つである。

白鳳期以降には、仏教思想の高まりとともに全国的に多くの寺院が建立され、7世紀中頃に倉吉市大御庵寺、東郷町の野方・弥陀ヶ平魔寺が、後半には東伯町畜尾庵寺、倉吉市大原庵寺、鹿野町の寺内庵寺が造営されたと推測される。

奈良時代には律令体制が敷かれて、現在の岩美郡国府町に因幡国守、倉吉市国府に伯耆守が置かれて、その周辺に国分寺や國分尼寺も建立される。因幡国愛多郡には大原・坂本・白沼・勝見・大坂・日置・勝部の七郷が置かれたが、青谷町は日置郷と勝部郷に相当すると考えられる。愛多郡衛は大坂郷にあたる気高町の上原南遺跡・上原遺跡・上原西遺跡・山宮阿弥陀院遺跡からなる上原遺跡群と考えられている。さらに、倉吉市の大不間遺跡、氣高町の陸達遺跡や戸島遺跡・馬場道路など大型の掘立柱建物が出土した遺跡もある。この時代の集落には、掘立柱建物を中心とする倉吉市觀音堂遺跡、氣高町の会下郡家遺跡、竪穴住居を中心とする倉吉市平ル林遺跡などがある。奈良時代の遺跡は発掘調査例が少ないが、泊村では石第3号遺跡森末地区1区から竪穴住居跡、寺戸第1遺跡には竪穴住居跡や製塗土器が出土した段状遺構などがあり、小浜小谷遺跡では土坑内から須恵器が出土

している。青谷町ではカヤマ遺跡で土器などが出土しているのみである。この時代には官道が整備され、因幡・伯耆両国には山陰道が設けられるが、因幡国内に置かれた4ヶ所の駅のうち、青谷町の相屋神社周辺は延喜式にみえる「柏尾駅」の有力な候補地と云われている。

平安時代末期になると末法思想が広まり、経塲が作られるようになる。東郷町倭文神社境内に隣接した丘陵から発見された伯耆一宮塙坂からは1103年に当たる「(中略)康和五年癸未(中略)銘を持つ鉄銅製經筒・鉄銅製觀音菩薩立像・鉄銅製千手觀音菩薩立像・鐵板線刻弥勒菩薩立像などが出土し、一括して国宝に指定されている。また、気高町の勝見経塲や青谷町の千龍寺経塲からは陶製の經筒が出土している。また、倉吉市桜の大日寺からは延久3(1071)年銘の残る瓦経が出土している。この時代に関する発掘調査例は多くないが、泊村の石胎第3遺跡森木地区1区では奈良時代以降とされる掘立柱建物跡や溝状遺構が出土し、守戸第1遺跡では掘立柱建物跡が段状遺構や溝状遺構などと共に検出されており、鹿野町の柄杓目遺跡では一般的な住居とは性格が異なると思われる大型の掘立柱建物群が確認されている。

鎌倉時代初期の建久5(1194)年には伯耆須賀庄と呼ばれる莊園が藤原氏の所領であったが、武士の勢力が次第に強くなり、正嘉2(1258)年銘の残る「伯耆国河村郡東郷庄下地中分経塲」では領家の京都松尾社と原田氏とされる地頭による莊園分割が描かれ、地頭の莊園侵略の様子や当時の東郷池周辺の地理などが窺われる。

中世には気多郡内にも莊園が置かれた。気高町上光・下光元付近の光元保や勝見付近の勝見郷、青谷町の日置川流域にあった日置郷、勝部川・長和瀬川流域にあった勝部郷などの存在が記録に残されている。集落として倉吉市今倉遺跡の住居跡があり、また、中世貝塚が東郷町門田遺跡・羽町町南谷貝塚遺跡で見つかっている。長瀬高浜遺跡では、鎌倉から安土桃山時代の火葬墓や土壙墓と水田跡が調査されている。

南北朝時代の延元2〔=建武4〕(1337)年には伯耆守護、正平18〔=貞治2〕(1363)年には因幡守護にも任じられ、伯耆・因幡両国に勢力を誇った山名氏は、又和年間(1352~1355)に岩美町岩富に二上山城を築き因幡国統治の拠点とするとともに、伯耆国統治の拠点となる守護所として倉吉市田内に田内城を築いたとされる。同時期の正平21〔=貞治5〕(1366)年には南条貞宗によって東郷町に羽衣石城が築かれたと云われている。その後、山名氏一族は中国から近畿地方にかけての11ヶ国の守護となり、「六分の一殿」と呼ばれるほどの勢力を誇ることになった。因幡では文正元(1466)年ごろに鳥取市瀬山の天神山城に、さらに天正元(1573)年には鳥取城へと居城が移っていました。伯耆の山名氏はその後倉吉市の打吹城に城を移したが、大永4(1524)年に出雲の尼子経久が伯耆に侵入して打吹城を落城させたことで山名氏の伯耆支配は終わりを迎えた。その後、尼子氏に替わって毛利氏が因幡・伯耆国に勢力を拡げることになる。しかし、天下布武を目指す織田信長と敵対したため、天正9(1581)年に毛利勢の籠城していた鳥取城が羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)によって包囲され、兵糧攻めが行われた。そのため、秀吉勢の背後を突くべく出陣した吉川元春が築いたとされる土塁が馬ノ山に残っている。その後、泊村域が含まれる河村郡などの東伯耆は羽衣石城主の南条元綱、青谷町域が含まれる気多郡などの西因幡を鹿野城主の龜井茲矩が領有した。龜井茲矩は慶長12(1607)年以降に3度朱印状を受けて南蛮貿易を行うとともに、日光池や湖山池の干拓、千代川の治水工事や人井手用水の開削などを実施した。

慶長5(1600)年の関ヶ原の戦後、鳥取城に池田長吉、若狭城に山崎家盛、鹿野城には龜井茲矩があつて因幡を分知したが、元和3(1617)年、姫路藩主であった池田光政が因幡・伯耆2国を鳥取藩主となるのに伴い池田・山崎・龜井の3氏は他国へ移封となつた。その後寛永9(1632)年には岡山藩主の池田光仲が因替えによつて鳥取藩主に転封となり、以後明治維新まで鳥取藩は池田氏の統治下に置かれた。江戸時代末期には日本海沖にも外国船が頻繁に出現し始め、鳥取藩でも沿岸防備のため文久3(1863)年から砲台設置に着手し、海岸線に8基の台場が建設された。県中部では赤崎、由良、橋津に築かれている。このうち由良台場は西洋式の城塞プランが取り入れられており、藩建造の台場としてはきわめて異色で貴重なものである。

明治4(1871)年、廢藩置県により鳥取藩は無くなり新たに鳥取県が出来る。明治9(1876)年に鳥取県は島根県に合併され無くなるが、明治14(1881)年には再び鳥取県が分離・組織され、今日に至る。



○ 遺跡 ● 古墳群 ▲ 神社

- | | | | |
|---------------|--------------|------------|------------|
| 1. 石藍第3遺跡森末地区 | 15. 橋井神社 | 29. 大坪古墳群 | 43. 山宮古墳群 |
| 2. 寺戸第1遺跡 | 16. 嘴淹古墳群 | 30. 大口古墳群 | 44. 上原古墳群 |
| 3. 寺戸第2遺跡 | 17. 長和瀬古墳群 | 31. 早牛古墳群 | 45. 飯里古墳群 |
| 4. 寺戸第3遺跡 | 18. 長谷和瀬谷田遺跡 | 32. カヤ遺跡 | 46. 短尾遺跡 |
| 5. 小浜ワラ畑遺跡 | 19. 長谷古墳群 | 33. 早牛遺跡 | 47. 会下郡家遺跡 |
| 6. 尾後遺跡 | 20. 井手古墳群 | 34. 利川神社 | 48. 瞳連遺跡 |
| 7. 池ノ谷西平第1遺跡 | 21. 吉川古墳群 | 35. 阿古山古墳群 | 49. 三王尻遺跡 |
| 8. 池ノ谷西平第2遺跡 | 22. 相屋神社 | 36. 羿鄉古墳群 | 50. 山宮笹尾遺跡 |
| 9. 小浜千速遺跡 | 23. 青谷上寺地遺跡 | 37. 蔵内古墳群 | 51. 上原西遺跡 |
| 10. 池ノ谷第1遺跡 | 24. 亀尻古墳群 | 38. 藏内水船遺跡 | 52. 上原遺跡 |
| 11. 池ノ谷第2遺跡 | 25. 鹿谷古墳群 | 39. 八束水古墳群 | 53. 上原南遺跡 |
| 12. 笹谷遺跡 | 26. 善田古墳群 | 40. 下原古墳群 | 54. 山宮古墳群 |
| 13. 小浜古墳群 | 27. 長尾鼻古墳群 | 41. 会下古墳群 | 55. 田仲古墳群 |
| 14. 釜ノ口古墳群 | 28. 奥崎古墳群 | 42. 瞳逢古墳群 | |

図2 周辺遺跡分布図

註・参考文献

1. 青谷町誌編纂委員会『青谷町誌』 1984年
2. 青谷町教育委員会『カヤマ遺跡試掘調査報告書』 1982年
3. 青谷町教育委員会『大口古墳群発掘調査報告書』 1985年
4. 青谷町教育委員会『大口遺跡群発掘調査報告書』 1989年
5. 青谷町教育委員会『藏内古墳群発掘調査報告書』 1989年
6. 青谷町教育委員会『長谷古墳群発掘調査報告書』 1989年
7. 青谷町教育委員会『青谷町内遺跡発掘調査報告書I』 1992年
8. 青谷町教育委員会『青谷町内遺跡発掘調査報告書II』 1993年
9. 青谷町教育委員会『青谷町内遺跡発掘調査報告書III』 1994年
10. 青谷町教育委員会『青谷町内遺跡発掘調査報告書IV』 1995年
11. 青谷町教育委員会『青谷町内遺跡発掘調査報告書V』 1996年
12. 青谷町教育委員会『青谷町内遺跡発掘調査報告書VI』 1997年
13. 泊村教育委員会『泊村内遺跡発掘調査報告書』 1989
14. 泊村『泊村誌』 1989
15. 泊村教育委員会『團古墳群発掘調査報告書』 1990
16. 泊村教育委員会『泊村内遺跡発掘調査報告書』 1996
17. 泊村教育委員会『泊村内遺跡発掘調査報告書』 1997
18. 東郷町教育委員会『津浪遺跡発掘調査報告書』 1974
19. 東郷町教育委員会『佐美4・13号墳発掘調査報告書』 1979
20. 東郷町教育委員会『平片5号墳発掘調査報告書』 1977
21. 東郷町『東郷町史』 1987
22. 羽合町『羽合町史』 前編 1967
23. 羽合町教育委員会『南谷18号墳発掘調査報告書』 1988
24. 羽合町教育委員会『羽合町内遺跡発掘調査報告書』 1989
25. 羽合町教育委員会『南谷所の遺跡群（大ナル地区・ヒジリ地区）』 1990
26. 羽合町教育委員会『南谷貝塚遺跡発掘調査報告書』 1990
27. 羽合町教育委員会『天保14年伯耆国河村郡南谷村出船地続全國』
28. 倉吉市教育委員会『伯耆国分寺発掘調査概報』 1973
29. 倉吉市教育委員会『伯耆国守跡発掘調査概報（第3次）』 1975
30. 倉吉市教育委員会『伯耆国守跡発掘調査概報』第3次・第5次・第6次 1975～1978
31. 倉吉市教育委員会『大宮古墳発掘調査概報』 1979
32. 倉吉市教育委員会『上米城遺跡発掘調査報告II一阿弥大寺地区一』 1980
33. 倉吉市教育委員会『高森2号墳（瀬手2号墳）発掘調査報告書』 1982
34. 倉吉市教育委員会『立縫遺跡群 取木遺跡・一反半田遺跡発掘調査報告書』 1984
35. 倉吉市教育委員会『津田峰遺跡発掘調査報告書』 1986
36. 倉吉市教育委員会『史蹟大原庵守跡第2次発掘調査概報』 1988
37. 烏取県教育文化財団『久占第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書』 1984
38. 烏取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』 II～VI 1981～1983
39. 烏取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』 IV埴輪編 1982
40. 烏取県教育文化財団『國西川遺跡・園7号墳、原第2遺跡』 1993
41. 烏取県教育文化財団『石藤第3遺跡・石脇8・9号墳・寺戸第1遺跡・寺戸第2遺跡・石脇第1遺跡』 1998
42. 烏取県教育文化財団『小浜ワラ畑遺跡・小浜小谷遺跡・池ノ谷第2遺跡』 1999
43. 烏取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡調査・園第6遺跡』 1999
44. 烏取県埋蔵文化財センター『弥生時代の鳥取県』 1985
45. 烏取県埋蔵文化財センター『旧石器・縄文時代の鳥取県』 1988
46. 烏取県教育委員会『鳥取県文化財調査報告書』第1集 1960
47. 烏取県教育委員会『東郷町大鼻遺跡』『埋蔵文化財発掘調査概報』 1973
48. 烏取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書III A・B・E・H地区』 1978
49. 烏取県教育委員会『鳥取県装飾古墳分布調査概報』 1981
50. 烏取県教育委員会『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』 1984
51. 梅原末治『因伯二国に於ける古墳の調査』『鳥取県史蹟勝跡調査報告』第二冊 1924
52. 舟光清六『伯耆八幡町羽澤古墳遺跡』『考古学雑誌』第23巻4号 1933
53. 佐々木謙・龜井忠人『原始古代編』『鳥取県史』 I 鳥取県 1972
54. 名越勉・甲斐忠彦『鳥取県東郷町出土の小銅鐸』『考古学雑誌』第59巻2号 1973
55. 名越勉『原始・古代』『倉吉市史』 1973
56. 山陰考古学研究所『山陰の前期古墳文化の研究』 I 1978
57. 真田廣幸『奈良時代の伯耆国に見られる軒瓦の様相』『考古学雑誌』第66巻2号 1980
58. 真田廣幸『伯耆国大御堂廢寺考』『山陰考古学の諸問題』 1986

第3章 長谷古墳群の調査

第1節 調査の概要

鳥取県気高郡青谷町大字長和瀬に所在する長谷古墳群に属する16基の古墳のうち、長谷1号墳と7号墳の2基を調査した（註1）。長谷1号墳は、横穴式石室を主体部とする古墳であるが、埴丘は遺存しておらず、墳形は不明で、石室が露頭していた。石室は、両袖式の扁平板石組石室で、全長4.1mを測る。古墳に伴う遺物としては、玄室内より須恵器12点、耳環1点、漢道部より須恵器5点が出土している。また、石室を後世墓所として利用したようで、玄室内床面より15～25cm上方のレベルから、人骨と土師器が出土した（SK1）。長谷7号墳は、後背部に周溝を巡らす円墳と思われ、横穴式石室を主体部とする。埴丘はわずかに遺存していたが、石室は概ね露頭していた。石室は、両袖の扁平板石組石室で、全長2.7mを測る。後背の周溝底からは、断次的な埋葬施設の可能性が窺われる土坑（SK1）が検出された。長谷7号墳、SK1とともに、遺物は出土しなかった。

第2節 位置と環境

長谷古墳群は、鳥取県気高郡青谷町大字長和瀬字長谷に所在する。所在地は、旧因幡国気多郡に属する。長和瀬は、沿岸部では青谷町の最も西側にあたり、町境を挟んで東伯郡泊村と隣接する。町境は、旧因幡国と旧伯耆国の国境にあたる。長谷古墳群から南西方の網見集落に向かう途上で、ほどなく古代山陰道に行き当たるとみられるが、この付近の正確なルートは判明していない。

国道9号線を鳥取から米子方面へ向かう途中、青谷町の中心街を抜け、長和瀬集落にさしかかる手前、明神崎のカーブを過ぎたあたりに、海に臨んで開口する狭長な谷がある。9号線から左に逸れ、この谷筋に沿って農免農道が走るが、南に向かうこと約800mで、長谷古墳群に行き当たる。奥深い谷の中程にあたり、ここで谷は極端に蛇行している。古墳群は、浸食された丘陵の南面する斜面部から裾部にかけて立地している。

古墳は16基が確認されているが、うち現存するものは12基である。いずれも埴丘の遺存状態は悪く、横穴式石室が露頭しているものがほとんどである。1～6号墳、11～16号墳は標高25～35mの丘陵裾部に、7～10号墳は標高48～52mの丘陵斜面部に立地する。7号墳のみ離隔しているが、他の古墳は一列の曲線上に並ぶ。

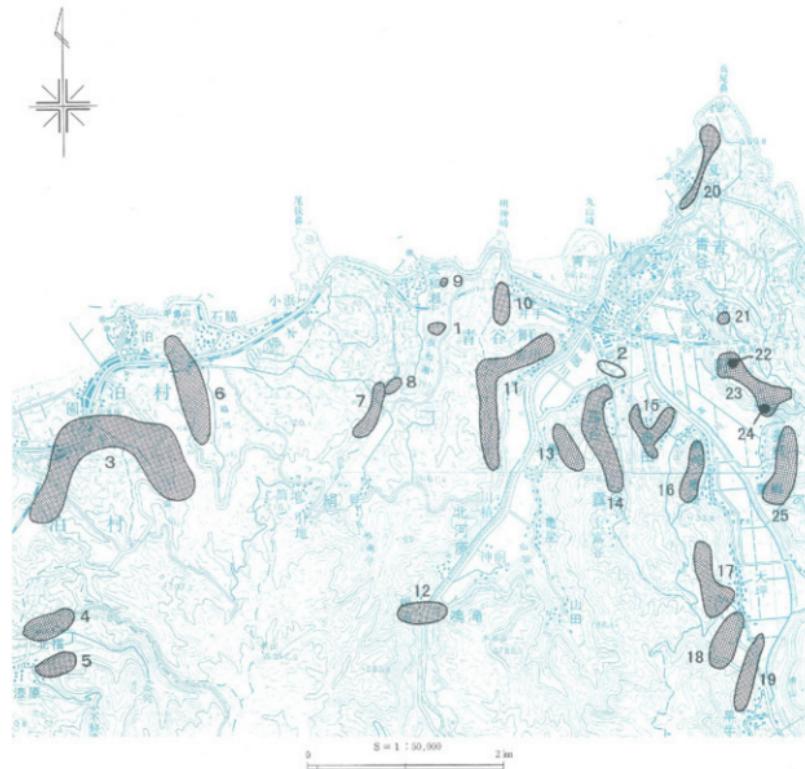
昭和63年度に、農免農道新設工事に伴って、11～14号墳の4基が発掘調査されている。埴丘、天井部が遺存するものはなかったが、いずれも扁平板石組石室であり、TK217併行の須恵器が出土している。また14号墳には、鉄製鎌車、鉄鍊など鉄製品が副葬されていた（註2）。なお、古墳群後背の丘陵斜面に数多く露頭する礫は、安山岩、板状安山岩、花崗岩であり、1号墳、7号墳の石室の石材として利用されたものと同質である（註3）。

第3節 調査の経過と方法

調査は、平成10年10月より着手した。長谷1号墳、7号墳それぞれに、横穴式石室の主軸方向を基準とした十字のラインで杭を設定し、これを実測用基準杭とした。のちに付近に4級基準点を設置し、これをもとに各任意杭の座標値を観測した。両古墳で調査前の地形測量を行ったのち、7号墳から掘り下げを開始した。7号墳では、基準ラインに則して4方向にトレントを設定し、埴丘や墓壙の遺存状況を土層断面で確認した上で、表土除去にかかった。埴丘の検出後は、遺存状況の実測を行い、全景写真の撮影を行った。また、埴丘盛土が遺存していたので、これを除去し、古墳築成の基盤面の地形測量を行った。石室については、流入土はほとんど無く、若干の床面清掃後に写真撮影を行い、基準ラインをもとに平面、立面の実測を行った。地形的な制約で石室の石材除去が困難であったため、トレントで石室の掘り方を確認するに留めた。

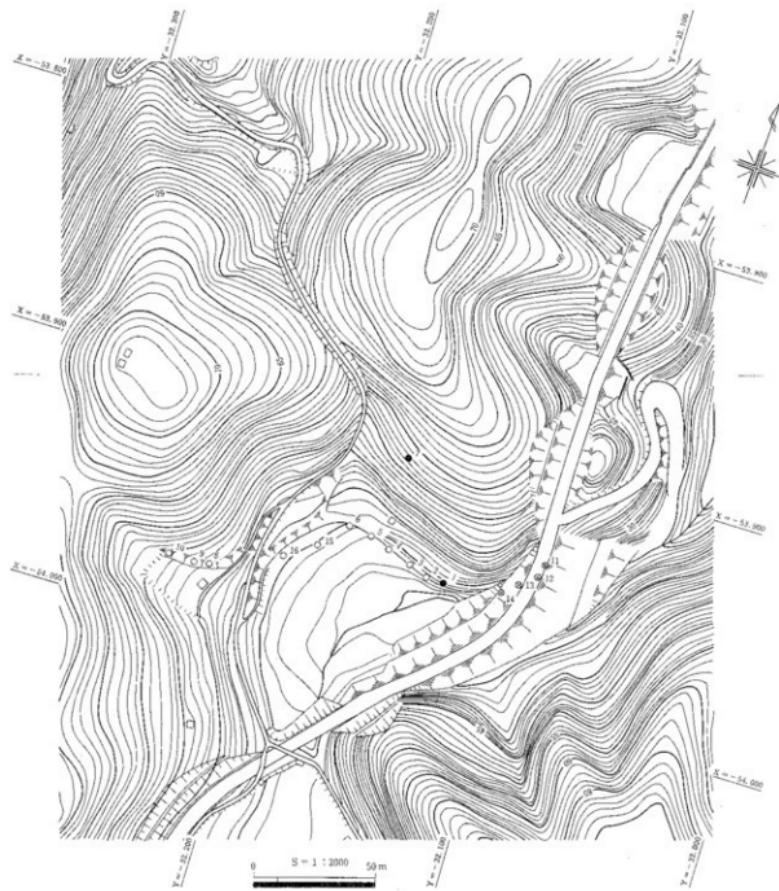
1号墳は、調査区間に接した位置に石室があるため、古墳の西側は調査範囲外である。よって基準ラインに則

して、西方向を除く3方向にトレーニングを設定し、墳丘や墓壇の遺存状況を土層断面で確認した上で、表土除去にかかった。掘り下げ後、墳丘が遺存していないかたため、検出状況の地形測量を行い、全景写真的撮影を行った。石室内には、多量の割石が詰め込まれており、これを除去したが、床面より15~20cmのレベルで人骨と土師器の出土をみた。後世に墓所として利用されたものと思われるが、掘り込みは確認できず、石室内の流入土上に安置されたものと判断した。出土状況の実測、取り上げ後、さらに掘り下げ、床面で古墳の副葬遺物を検出、写真撮影。出土状況の実測後、取り上げを行った。石室は、基準ラインをもとに平面、立面の実測を行った。1号墳も、地形的制約のため、石室の石材除去が困難であったため、石室の掘り方を確認するに留めた。なお1号墳は、側壁基底石の一部分に大きな亀裂を生じていたため、石室崩落の危険性を考慮し、工事用のサポートで天井石の支えの補助とし、万全を期した。調査は、平成10年12月に終了した。



- | | | | | |
|------------|-----------|-----------|------------|-------------|
| 1. 長谷古墳群 | 6. 石脇古墳群 | 11. 吉川古墳群 | 16. 奥崎古墳群 | 21. 東山古墳 |
| 2. 青谷上寺地遺跡 | 7. 小浜古墳群 | 12. 鴨池古墳群 | 17. 大坪古墳群 | 22. 阿古山2号墳 |
| 3. 國古墳群 | 8. 釜ノ口古墳群 | 13. 亀尻古墳群 | 18. 大口古墳群 | 23. 阿古山古墳群 |
| 4. 北福古墳群 | 9. 長和瀬古墳群 | 14. 露谷古墳群 | 19. 早牛古墳群 | 24. 阿古山22号墳 |
| 5. 漆原古墳群 | 10. 井手古墳群 | 15. 善田古墳群 | 20. 長尾鼻古墳群 | 25. 美郷古墳群 |

図3 周辺古墳分布図



挿図4 長谷古墳群分布図
 (●の位置は図上座標による、○の位置は目測による、×は消滅したもの)

第4節 長谷1号墳

1 位置と環境 (挿図4~9)

長谷1号墳は、標高30m付近の南面する丘陵斜面裾部に立地し、北緯 $35^{\circ}30'45''$ 、東經 $133^{\circ}58'47''$ に位置する。長谷古墳群中では比較的低位にあたり、東から3番目に位置する。樹岡地の經營等後世の攪乱により、墳丘盛土は消失、前庭部側は削平されており、墳形、後背周溝の有無は確認できなかった。開口部前面は、割石を多量に含む擾乱土によって造成されており、石室内は多量の割石によって充填されていた。石室の後背側には、

X = -53.950

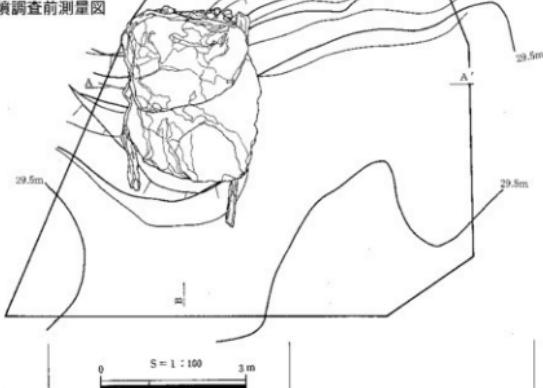
Y = -32.125

Y = -32.120

Y = -32.125

挿図5 長谷1号墳調査前測量図

X = -53.955



X = -53.960

0 S = 1 : 100 3 m

挿図6 長谷1号墳調査後測量図

X = -53.955

Y = -32.125

Y = -32.120

Y = -32.125

0 S = 1 : 100 3 m

X = -53.960

Y = -32.125

Y = -32.120

Y = -32.125

0 S = 1 : 100 3 m

石垣により段が造成されており、その上に狭小な平坦面が設けられている。平坦面は、北へ5mほどで丘陵斜面に行き当たり、そこから急峻に立ち上がっていく。石室は、天井石が架構された状態で、概ね露頭している。玄室の壁体構成は、奥壁、側壁とともに1枚石だが、両側壁の基底より上位奥壁側に若干積石しており、これを損なっている。玄門部は左右とも板石状の玄門石を残すが、右玄門石の上部を欠く（註4）。両玄門石の間には、框石が配されている。羨道部は、両側壁とも基底石のみ遺存し、側壁遺存部より南側の床面は攢乱されている。

2 墳丘・地山整形（挿図5～7）

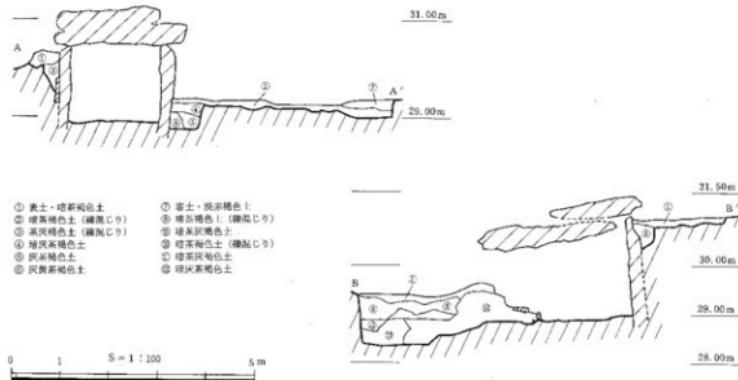
後世の地形の改変が甚だしく、墳丘盛土や地山整形の痕跡をほとんど残していない。表土下15cm前後で地山面にあたり、墳丘盛土の遺存は、部分的にさえ確認できなかった。ちなみに石室天井石最高位の標高は31.47mである。古墳の後背部も削平されており、墳形、後背周溝の有無は不明である。石室の掘り方は、北から南へ下る丘陵傾斜面の裾部をコの字形に掘削しており、その主軸は等高線にはほぼ直交する。

玄室の壁材は、掘削面に密着して立て掛けた据え、掘り方の上方を裏込めている。ただし、丘陵傾斜面裾部より開口方向寄りに位置する部分では、地山掘削の程度が浅くなるためか、立て掛けた構造になっていない。石材と掘り方の間隔を広くとって、裏込めしている。掘り方の規模は、東西ペルト部で幅3.65mを測り、南北ペルト部で長さ4.7m以上、深さは奥壁側で1.9m以上と推定される。掘り方底部は、玄室部から羨道部にかけて平坦であるが、前底部側が攢乱されているため、羨道部の側壁遺存部より南側の底部の状況は不明である。

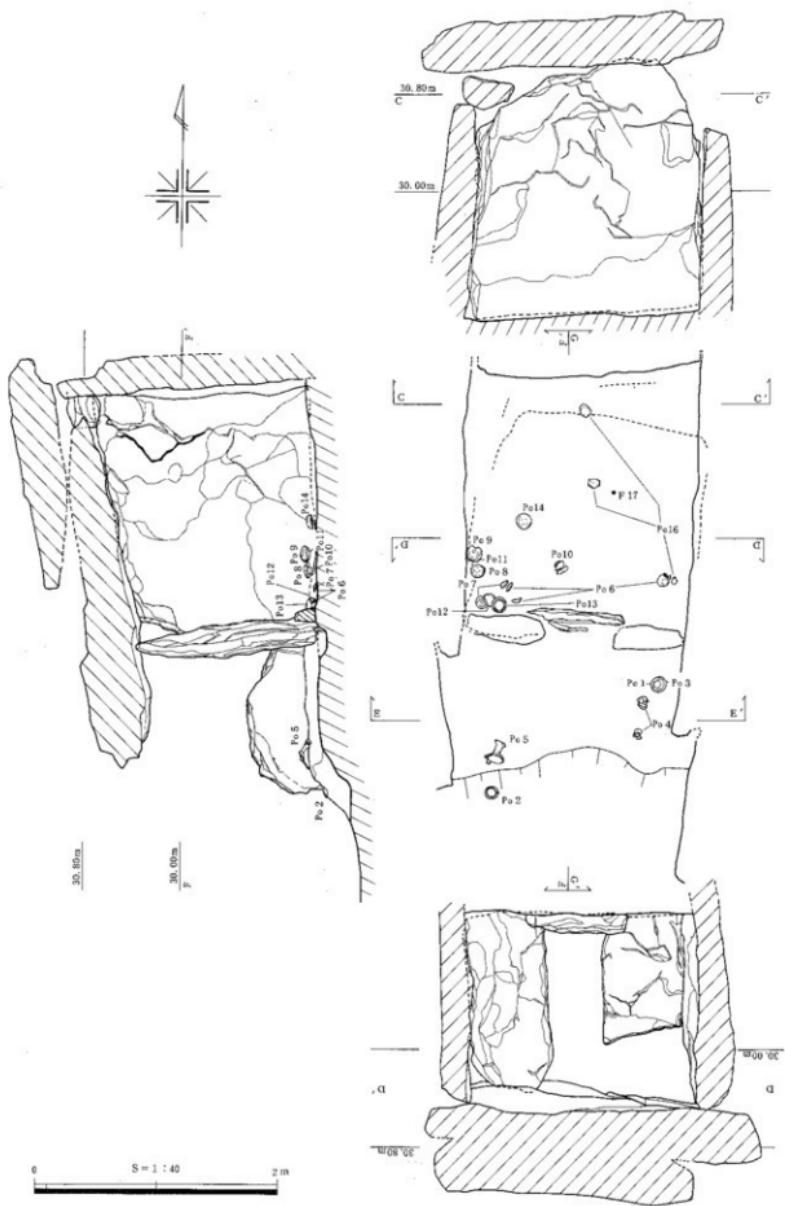
3 主体部（挿図8・9）

主体部は、南側に開口し、両袖の玄門石をもつ横穴式石室である。石室の全長は主軸で4.1mを測り、主軸方向はS 1° Eである。天井石は、上下2段が遺存する。下段は、玄門石に乗って羨道天井石を兼ねる1枚石である。南北長2.9mを測る長大なもので、玄室では奥壁の17cm手前まで達する。幅は東西で2.74m、最大厚46cmを測る。上段は、下段の天井石と奥壁の両方に架構された1枚石で、よって天井部奥壁側に南北17cm、高さ26cmほどの小空間が形成される。規模は、南北長2.11m、幅は東西で2.55m、最大厚35cm以上を測る。

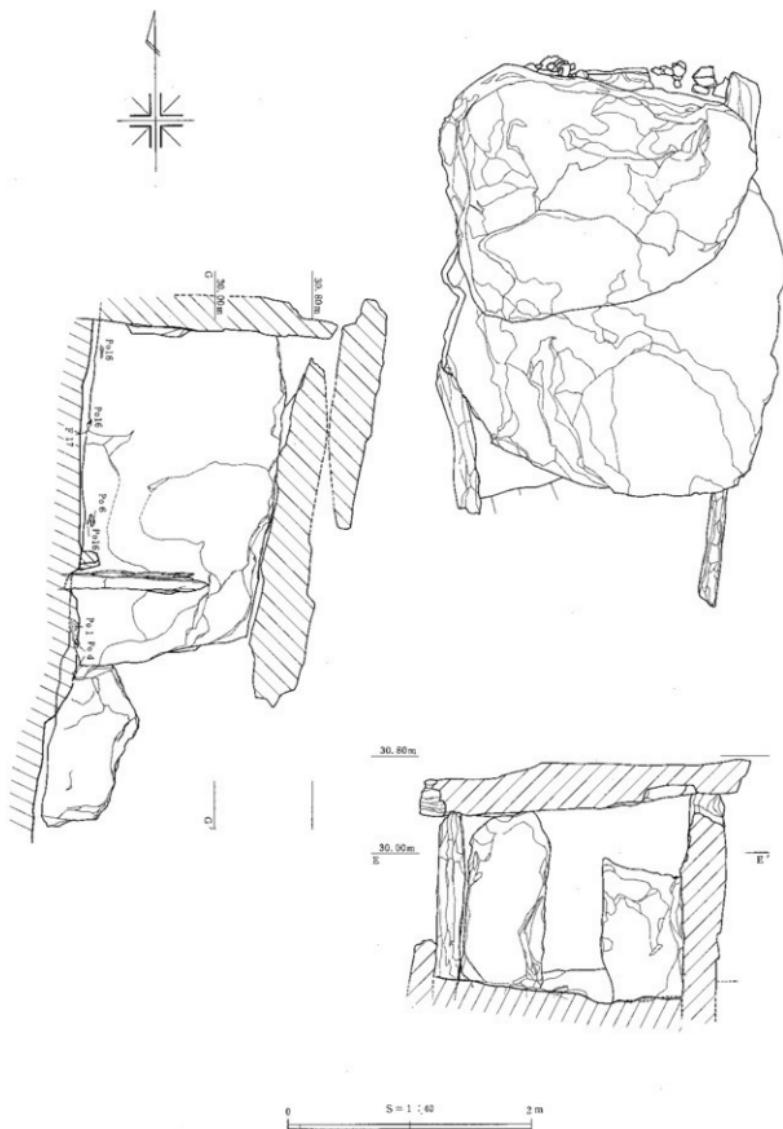
羨道は、右壁長1.87m、左壁長1.23m、幅は、玄門部側で1.85mを測る。高さは玄門部側で1.5m、天井石南端で1.54mを測り、羨道天井石の遺存長は89cmである。右側の玄室側壁は左壁に対して50cm長く、羨道側壁も兼ねているが、羨道の壁体構成は、この左右のズレを整えるものとなっていない。両羨道側壁は、壁面を玄室側壁に連ねず、玄室側壁を左右から挟み込むように設置されている。したがって平面プランは、開口部に向けてややすばまるか



挿図7 長谷1号墳土層断面図



挿図8 長谷1号墳石室実測図(1)



挿図9 長谷1号墳石室実測図(2)

のような印象を与える。右側壁は、玄室側壁からの延長が74cmあり、高さは1.45mである。これに続く側壁は、板石状の基底石1枚が遺存し、長さ1.15m、高さ68cm、厚さ15cmを測る。一方左側壁は、玄室側壁からの延長がほとんどなく、長さ1.03m、高さ48cm、厚さ19cmを測る板石状の基底石1枚が遺存する。右基底石は概ね直立し、左はやや内傾する。床面の横断面は、左から右に傾斜しており、その比高差は20cmである。

玄門部は、左右1枚ずつの板石を玄門石としている。右の玄門石は上位を欠いているが、本来左玄門石と同様に天井石まで達し、正面から見て、左右対称であったものと考える。右玄門石は幅67cm、遺存高1.2m、厚さ19cm、左玄門石は幅65cm、高さ1.5m、厚さ23cmを測る。玄門部の玄室側床面には、板石状の樋石が設置されており、幅80cm、高さ14.5cm、厚さ8.5cmを測る。

玄室は、奥壁幅1.89m、玄門部側の幅1.83m、右壁長2.17m、左壁長1.97mを測り、玄室比は1.1前後で正方形に近い平面形をなす。面積は3.8m²である。高さは、下段天井石の奥壁側で1.8m、玄門部側で1.51mを測るが、奥壁寄りでは上段天井石の架構のため、2.06mとなる。いずれにせよ、奥壁から開口方向に向け天井部は傾斜し、石室空間は低まっていく。壁体構成は、奥壁、両側壁とも基本的に1枚石を使用しており、天井石が側壁基底石に直接乗っている。ただし、奥壁寄りの基底石上には若干石を積んだよう、左側壁では塊石状の積み石が1点遺存し、右側壁では奥壁寄りが空洞になっている。基底石は、右壁で長さ3.15m、厚さ25cm、左壁で長さ2.5m、厚さ25cmのものを使用しており、玄室での壁高は、右で1.45～1.6m、左で1.38～1.74mを測る。床面は、敷石、客土は認められず、地山加工面を床面としている。

なお天井石、玄室側持ち送り部の石、樋石の石材は安山岩、それ以外はすべて板状安山岩が使用されている。

4 横穴式石室を利用した古墓（S X I）（挿図10）

玄室内を掘り下げ中、床面から15～25cm上位のレベルで人骨（註5）が出土した。右側壁玄門部寄りの地点に比較的集中しており、出土レベルがほぼ揃うことから、埋葬されたものの可能性があるが、墓壇は確認されず、攪乱を被っている。S X Iと命名した。出土した骨のうち一部に管状骨を確認したが、大半は細片で腐食が進んでおり、埋葬肢位を復元することはできなかった。ただし人骨は、火葬骨ではない。この人骨の出土レベルの前後で、土師器が5点（挿図11 Po19～23）出土しているが、どれがこの埋葬に伴うものかの判断はできなかつた。

5 遺物と出土状況

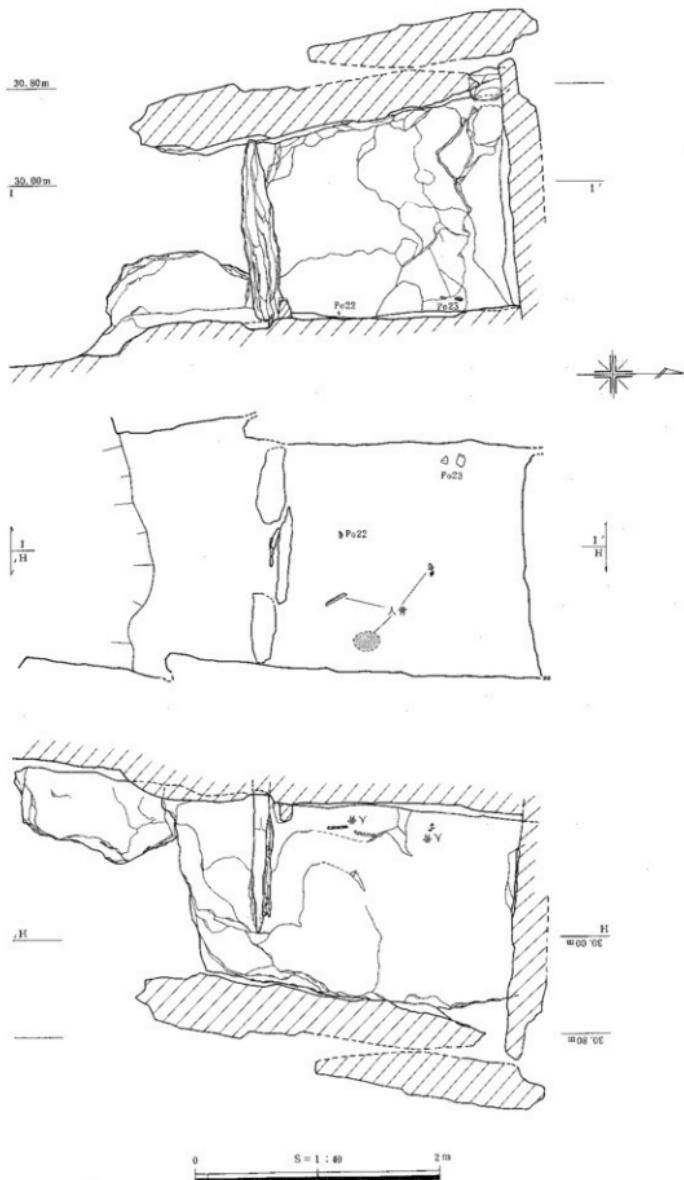
・漢道部出土遺物（挿図8・11）

挿図7のPo 1～5の須恵器5点である。うちPo 1・3・5は漢道部床面上から出土している。Po 1～3は完形品で、Po 4は一部欠損、Po 5は肩部以下を全く欠いている。Po 1・3・4は右壁寄りに、Po 2・5は左壁寄りで出土している。Po 1は裏返ったPo 3の底部に重なり、Po 4は破片が2箇所に分かれているが、いずれも底部を上にしている。Po 2は口縁部を上にして攪乱域から出土し、Po 5は口頭部が玄室方向に倒れた状態で出土した。

Po 1は坪蓋である。口縁端部内面に沈線状の鈍い溝がめぐり、天井部はヘラ切り後粗くナデている。体部外面上に漆が付着しており、漆記号とも思われるが判読できない。Po 2・3は坪身である。両者とも立ち上がりが低く、底部はヘラ切り後粗くナデしている。Po 2は他に比して小ぶりである。Po 4は高台付きの環で、体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後、中央部のみ若干ナデ消している。Po 5は長頸壺である。肩部の稜線はシャープで、2条の沈線がめぐる。

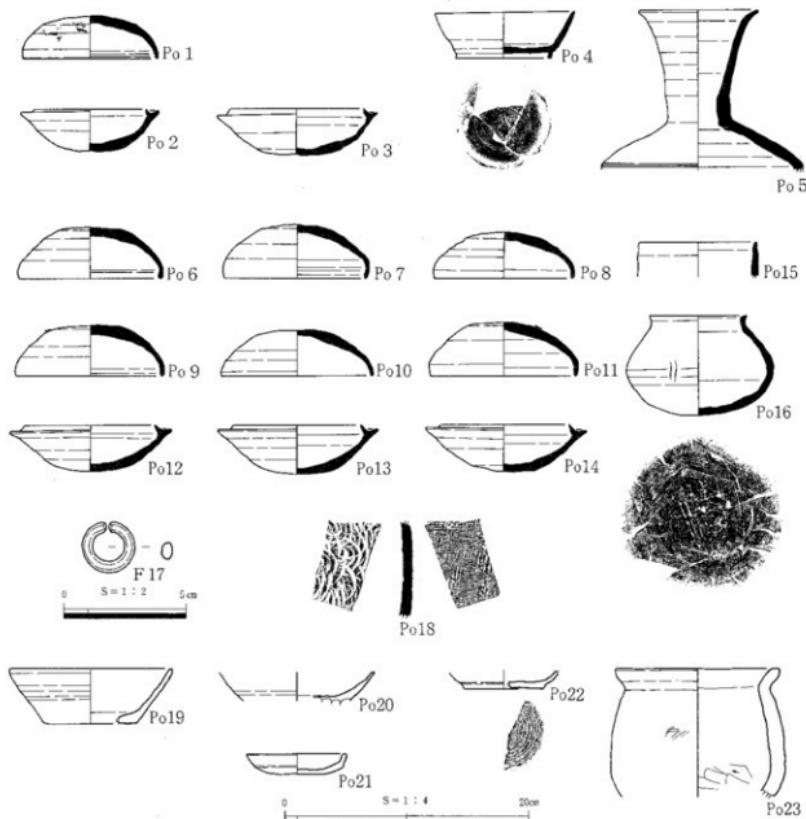
・玄室内出土遺物（挿図8・10・11）

挿図7のPo 6～23は玄室内出土であるが、古墳に直接関わる遺物はPo 6～18と思われる。Po 6～16・18は須恵器、F 17は耳環である。うち出土位置を捕捉できたのはPo 6～14・16・F 17である。主軸より右側のエリアから出土したのはPo 6・16・F 17である。Po 6・16は床面より若干浮き、F 17は床面上から出土した。Po 6とPo 16は破片の散らばりが広く、Po 6については左玄門石近くまで破片が及んでいた。接合の結果、Po 6は



插図10 古墓遺物出土状況図

ば完形に復元でき、Po16も一部を欠くものの完形近くまで復元できた。主軸より左側のエリアから出土したのはPo 7~14である。Po10は主軸線寄りで、床面より若干浮いた状態で出土した。破損しており、接合の結果口縁部を4分の3ほど欠いていた。Po 7・12・13は左玄門石と左壁のコーナー付近で出土した。いずれも床面より若干浮いていた。Po12・13は完形品で、Po 7は破片が若干ばらついた状態であったが、接合の結果完形品になった。Po 7が天井部を上、Po12が底部を上、Po13が口縁部を上にし、3点が接した状態で出土した。Po 8・9・11は左壁沿いで出土した。Po 8は天井部を下にしており、床面より若干浮いていた。完形であった。



挿図11 長谷1号墳出土遺物実測図

挿表1 長谷1号墳出土遺物観察表

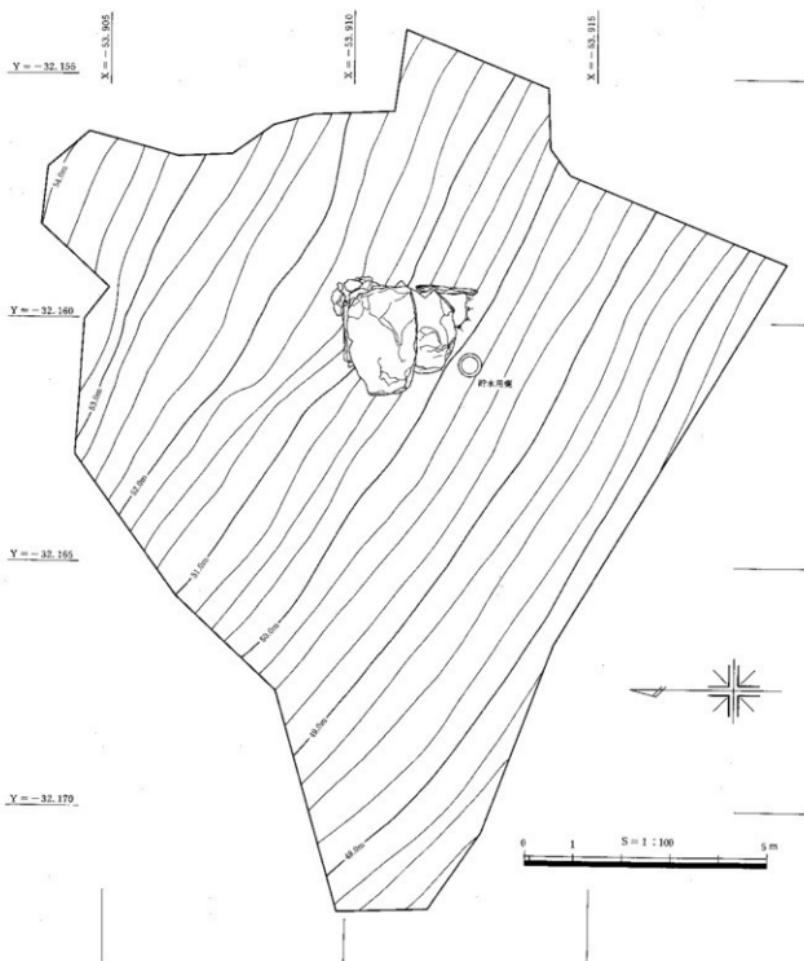
(a : 口径、b : 器高、c : 底径、△は残存値、※は復元値を示す)

遺物番号	押印番号	因数番号	出土地点	器形	法量(cm)	特徴	胎土	色調	実測番号
Po1	11	3	後部 須恵器 环蓋	a : 11.0 b : 3.5	体部外面回転ヨコナデ、大井部外側へラ切り後組 いナデ、板目直孔あり、体部内面回転ヨコナデ大井 部内面不整方向ナゲ、口縁端部内面に沈窪状の槽、 体部外側に漆付着痕	1~2mmの大砂粒を含む	灰白色~ 青灰色	山根13	
Po2	11	3	後部 須恵器 环身	a : 9.2 b : 3.5	体部外面回転ヨコナデ、底部外側へラ切り後組 工具による調節、体部内面回転ヨコナデ、底部 内面不整方向ナゲ、龜に比べて小ぶり	2~5mmの大砂粒を含む	灰白色~ 青灰色	山根22	
Po3	11	3	後部 須恵器 环身	a : 10.9 b : 3.9	体部外面回転ヨコナデ、底部外側へラ切り後組 いナデ、体部内面回転ヨコナデ、底部内面不整方向 ナゲ	微細な砂粒を含む	灰白色	山根25	
Po4	11	4	後部 須恵器 环	a : 11.5 b : 3.9 c : 7.8	体部外面回転ヨコナデ、うち下半部に1条のひねり ヨコナデ、体部内面回転ヨコナデ、高さ5mm、幅4 mmの高台を貼り付ける、底部外側回転系切り、中 央部をアーチ形す、底部内面不整方向ナゲ	微細な砂粒を含む	灰白色	山根20	
Po5	11	4	後部 須恵器 長颈瓶	a : 9.7 b : 3.2△ c : -	口縁部一環と内面回転ヨコナデ、肩部の後組は シャープで、2条の凹線がある。肩部以下を欠く	2~4mmの大砂粒を含む	灰白色	山根26	
Po6	11	3	玄室内 須恵器 环蓋	a : 11.6 b : 4.2	体部外面回転ヨコナデ、天井部外側へラ切り後組 いナデ、体部内面回転ヨコナデ、天井部内面不整方 向ナゲ、口縁端部をやや肥厚させる	1mm以下の砂粒を含む	灰白色~ オリーブ 灰色	山根14	
Po7	11	3	玄室内 須恵器 环蓋	a : 11.5 b : 4.4	体部外面回転ヨコナデ、大井部外側へラ切り後組 いナデ、工具による調節がある、体部外側回転ヨ コナデ、大井部内面不整方向ナゲ、口縁端部をや や肥厚させる。Po12の付合	1mm以下の砂粒を含む	灰白色	山根16	
Po8	11	3	玄室内 須恵器 环蓋	a : 11.3 b : 3.9	体部外面回転ヨコナデ、天井部外側へラ切り後組 いナデ、体部内面回転ヨコナデ、天井部内面不整 方向ナゲ	1mm以下の砂粒を含む	灰白色	山根15	
Po9	11	3	玄室内 須恵器 环蓋	a : 12.0 b : 4.2	体部外面回転ヨコナデ、天井部外側へラ切り後組 いナデ、工具による調節があり、出ね當時の上締片 融着、体部内面回転ヨコナデ、大井部内面不整方 向ナゲ、口縁端部をやや肥厚させる	1~2mmの大砂粒を含む	灰白色	山根17	
Po10	11	3	玄室内 須恵器 环蓋	a : 12.3※ b : 3.8	体部外面回転ヨコナデ、天井部外側へラ切り後組 いナデ、切り離し時の粘土粒付着、体部外側上方 に横帯状の漆付着、体部内面回転ヨコナデ、天井部 内面不整方向ナゲ	1mm以下の砂粒を含む	灰白色~ 灰色	山根18	
Po11	11	4	玄室内 須恵器 环身	a : 11.9※ b : 4.5	体部外面回転ヨコナデ、大井部外側へラ切り後組 いナデ、切り離し時の粘土粒付着、体部内面回転 ヨコナデ、大井部内面不整方向ナゲ	1mm以下の砂粒を含む	灰白色	山根19	
Po12	11	4	玄室内 須恵器 环身	a : 10.5 b : 4.1	体部外面回転ヨコナデ、底部外側へラ切り後組 いナデ、切り離し時の粘土粒付着、体部外側上方 に横帯状の漆付着、体部内面回転ヨコナデ、天井部 内面不整方向ナゲ	微細な砂粒を含む	灰白色	山根23	
Po13	11	4	玄室内 須恵器 环身	a : 10.7 b : 3.9	体部外面回転ヨコナデ、底部外側へラ切り後組 いナデ、工具による調節、体部内面回転ヨコナデ、 天井部内面不整方向ナゲ	1~2mmの大砂粒を含む	灰白色	山根21	
Po14	11	4	玄室内 須恵器 环身	a : 10.6 b : 3.9	体部外面回転ヨコナデ、底部外側へラ切り後組 いナデ、体部内面回転ヨコナデ、底部内面不整方向 ナゲ	1~2mmの大砂粒を含む	灰白色~ 灰色	山根24	
Po15	11	4	玄室内 須恵器 环身?	a : 9.6※ b : 2.8△ c : -	口縁部、内外面回転ヨコナデ	1mm以下の砂粒を含む	灰白色	山根33	
Po16	11	4	玄室内 須恵器 短颈瓶	a : 8.0 b : 8.2	体部外側回転ヨコナデ、高部外側不整方向への ラケテ、底部内面不整方向ナゲ、体部中位に横 方向の2条の工具痕	2~3mmの大砂粒を含む	灰白色	山根27	
F17	11	4	玄室内 耳瓶	編幅: 2.05 ヨ: 0.45× 0.7 横幅: 2.2	金銀糸、断面小判形	-	-	山根44	
Po18	11	5	玄室内 須恵器 瓶?	-	側溝部、外面平行タタキ後カキメ、内面開円タ タキ	南	灰白色	山根35	
Po19	11	5	玄室内 土師器 环?	a : 13.4※ b : 4.6 c : 7.8※	側溝形成、体部外側面、底部内面回転ヨコナデ、 底部外側回転系切り、口縁端部をややまみ上げ る	1~2mmの大砂粒を含む にぶい橙 色	山根29		
Po20	11	5	玄室内 土師器 环?	a : - b : 2.3△ c : -	側溝形成、口縁部、底盤を灰く、底部外側回転 ヨコナデ、底部内面不整方向ナゲ	1mm以下の砂粒を含む	淡黄褐色~ 灰褐色	山根34	
Po21	11	5	玄室内 土師器 皿	a : 8.3 b : 1.8 c : 3.8	手捏ね成形、体部外側面ヨコナデ、底部外側ナデ、 内面不整方向ナゲ	1mm以下の砂粒を含む	にぶい橙 色	山根30	
Po22	11	5	玄室内 土師器 皿?	a : - b : 1.5△ c : 6.4※	側溝成形、体部外側回転ヨコナデ、底部外側ヨコナデ、 底部外側回転系切り、底部外側回転ヨコナデ、 口縁端部を灰く	1mm以下の砂粒を含む、 雲母を含む	灰黄褐色	山根32	
Po23	11	5	玄室内 土師器 皿?	a : 13.3※ b : 10.5△	口縫部外側ヨコナデ、脚部外側面に厚く漆付着 し調整不明、口縫部外側ナゲ、脚部内面上平ハラ ケズリ、底盤を灰く	1~2mmの大砂粒を含む	暗褐色	山根28	

Po11は口縁部を3分の1程度欠くものであるが、床面直上から天井部を下にした状態で出土した。Po9は天井部を下にして、Po11の上に重なった状態で出土した。完形品である。Po14は完形品で、Po9とPo16の中間地點に位置する。底部を上にした状態で、床面直上から出土した。Po15・18は流入土中から出土した。

Po6～11は環蓋、Po12～14は环身で、いずれもヘラ切り後天井部を粗くナデている。Po15は壺の口縁部か。Po16は短頸壺で、底部外面を不整方向にケズっている。体部中位外面に、2条の工具痕が認められる。Po18は壺の洞部で、外面平行タタキ後カキメ、内面同心円タタキである。F17は耳環で、金鍍金が施されている。

Po19～23は占墳時代以降の土師器である。出土地点を捕捉できたのはPo22・23である。Po22は主軸線付近の



挿図12 長谷7号墳調査前墳丘測量図

玄門部寄りの地点で出土し、出土レベルは人骨より低位である。Po23は左壁沿いの奥壁寄りの地点で出土し、出土レベルは人骨とほぼ同位である。Po19・20は環で、いずれも轆轤成形である。Po19は直線的に立ち上がる体部で、底部には静止糸切り痕が認められる。Po21・22は皿である。Po21は手捏ね成形で、口縁部を強くヨコナデし、底部中央部がややくぼむ。油煤痕は認められない。Po22は轆轤成形で、底部に回転糸切り痕が認められる。Po23は甌で、やや厚手であり、口頭部外面はヨコナデ、側部内面はヘラケズリ調整である。胴部外面には、厚く煤が付着しており、外面調整は不明である。

第5節 長谷7号墳

1 位置と環境（挿図4・12～16）

長谷7号墳は、標高51m付近の南西に面する丘陵斜面部に立地し、北緯 $35^{\circ} 30' 47''$ 、東経 $133^{\circ} 58' 46''$ に位置する。長谷古墳群中では最高位に位置し、古墳群が並ぶ曲線列から外れ、離隔している。1号墳からは直線で約55m離れている。樹園地の經營等後世の搅乱により、前庭部側は原形を留めておらず、墳丘盛土はわずかに遺存するのみで、石室は、天井石が架構された状態で露頭している。後背側に周溝が検出され、もって円墳と判断された。石室は、果樹園用の集水施設とされていたようで、開口部に貯水用の水甌が据え置かれていた。石室は完全に開口しており、床面に板石が5枚敷かれていたが、後世の再利用時に設置されたものと思われる。玄室は、天井石が遺存するものの、左側壁の基底石より上位を損なっている。玄門石は遺存していないが、掘り方は左右とも確認されており、両袖式の石室と推察される。

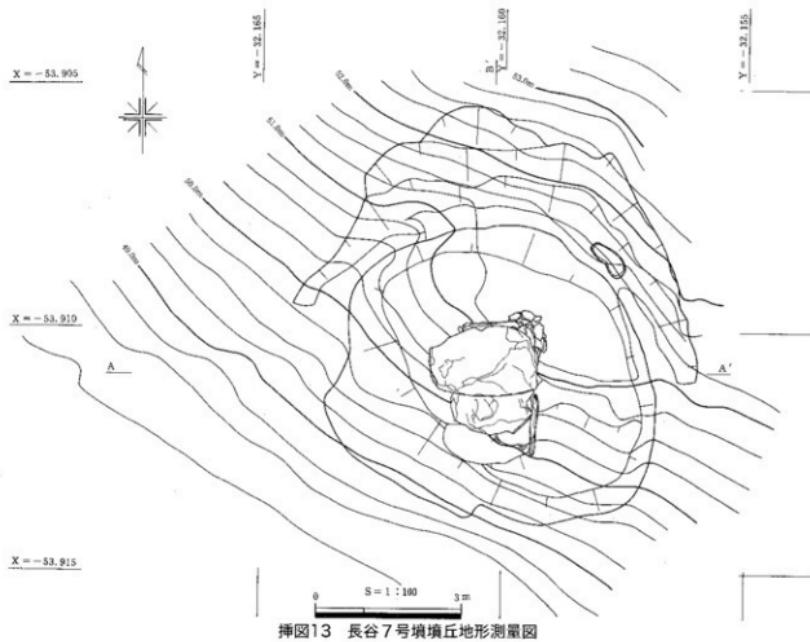
2 墳丘・地山整形（挿図13～15）

後世の地形の改変のため、墳丘盛土や前庭部を損ねている。表土下10～15cmで墳丘面にあたり、遺存する墳丘の最高位の標高は51.3mである。地山整形は、古墳の北東側後背部から南西側墳裾部まで及び、墳丘基底面のほぼ中央部に石室の掘り方を掘削している。墳丘は、後背部の地山整形の際に生じた土砂によって築造されており、同時に後背部に周溝をめぐらせている。原地形を有効に利用しているといえる。墳形は、後背の周溝により円墳と判断され、墳丘の北東～南西の遺存径が5.9m、北西～南東の遺存径が7.2mを測る。墳丘の高さは、南西部墳裾から墳頂までが2.5mを測り、周溝は、北東部で上端幅2.9m、下端幅40cmで、深さは後背側で1m、墳丘側で20cmを測る。墳丘盛土は第14回の⑫～⑬層で、石室の構築と並行して行われている。盛土の遺存厚は、最大70cmである。石室の掘り方は、墳丘基底面を鉛錘に掘削しており、その主軸は等高線から約45°振れる。玄室の壁材は、基底面に掘り方を穿って据え、掘り方との隙間に裏込めをして固定する。その後、墳丘を盛土する中途で天井石を架構しているが、遺存するのはここまでである。掘り方の規模は、東西ベルト部で幅3mを測り、南北ベルト部で長さ4.1m、深さは奥壁側で1mである。掘り方底部は、奥壁から開口方向に向けて緩やかに傾斜しており、調整のため客土を施して床面としている。

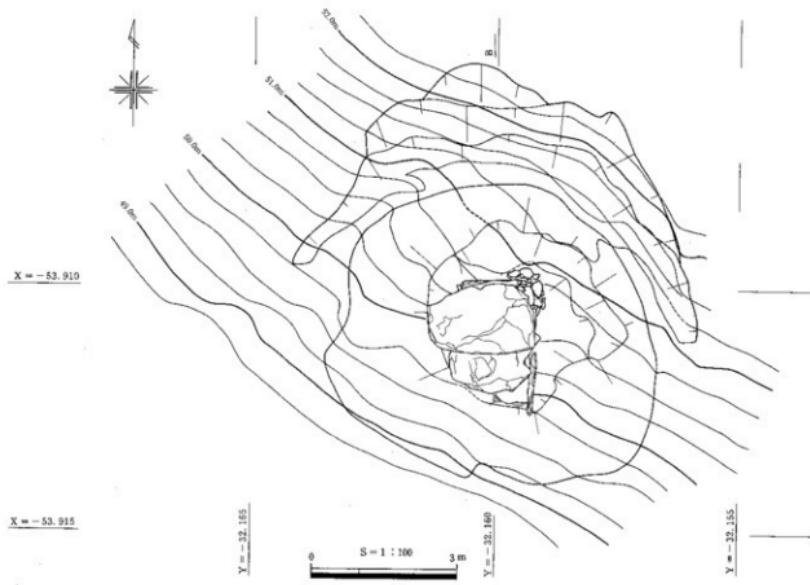
3 主体部（挿図16）

主体部は、南側に開口する横穴式石室である。石室の全長は主軸で2.7mを測り、主軸方向はS 7° Eである。天井石は、上下2段が遺存する。下段は、左右の側壁基底石に直接乗っており、南北長1.45m、幅は東西で1.66m、最大厚22cmを測る。上段は、下段の天井石と奥壁の両方に架構されており、よって天井部が奥壁側で1段高くなっている。左右の側壁基底石との間に隙間が生じるため、ここに板石を小口積みにしている。上段天井石の規模は、南北長1.43m、幅は東西で2.16m、最大厚20cmを測る。

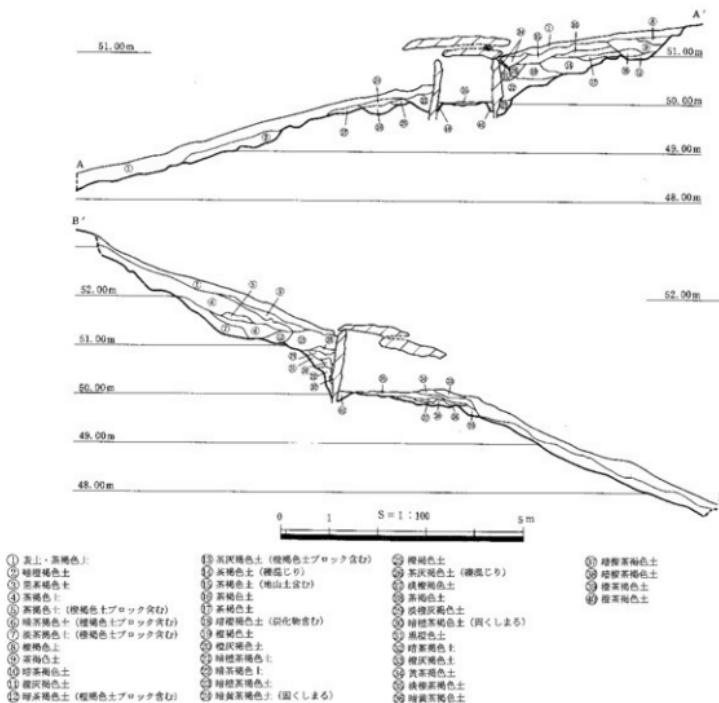
玄門部は、左右とも玄門石が遺存しておらず、その構造については不詳だが、玄門石の掘り方が左右とも検出され、よってこの石室は本来祠袖式であることが判明した。掘り方から推して、玄門石は幅20cm程度と思われる。なお框石については、掘り方を確認していない。



挿図13 長谷7号墳墳丘地形測量図



挿図14 長谷7号墳墳丘除去後測量図



挿図15 長谷7号墳土層断面図

漢道は、右壁長85cmを測るが、左壁は遺存していない。幅は、玄門部分で1.2m程度と推定される。高さは玄門部側で77cm、天井石南端で94cmを測り、漢道天井石の遺存長は50cmである。左右の玄室側壁の長さはほぼ等しく、漢道側に延びてこない。漢道側壁は、I号墳同様、壁面を玄室側壁に連ねず、玄室側壁の外側から立て掛けのように設置されている。右側壁は、板状石の基底石1枚が遺存し、やや内傾する。長さ85cm、高さ58cm、厚さ12cmを測る。床面は、玄室床面からほぼ平坦に連なるよう、地山加工面に40cm程度の客土を施して、床面としている。

玄室は、奥壁幅1.29mを測り、玄門石掘り方の位置から推定すると、玄門部側の幅は1.18m、右壁長1.83m、左壁長1.76mとなる。玄室比は1.4前後で、やや長方形に近い平面形をなす。高さは、下段天井石の奥壁側で94cm、玄門部側で77cmを測る。上段天井石の高さは、奥壁側で1.29m、玄門部側で1.18mを測り、奥壁から開口方向に向けて、石室空間は低まる傾向にある。壁体構成は、奥壁が1枚石、両側壁がともに大型の1枚石を基底石としており、その上位に板石を小口積みするものである。右壁では3段積まれているが、左壁は遺存していない。基底石は、右壁で長さ1.83m、厚さ18cm、左壁で長さ1.76m、厚さ18cmのものを使用しており、玄室での壁高は、右で90～94cm、左で84～91cmを測る。床面には敷石は認められず、地山加工面に3～35cm程度の客土を施して、床面としている。

遺物は、出土していない。なお奥壁側天井石、玄室右側壁には安山岩、奥壁には花崗岩、それ以外は板状安山岩が使用されている。

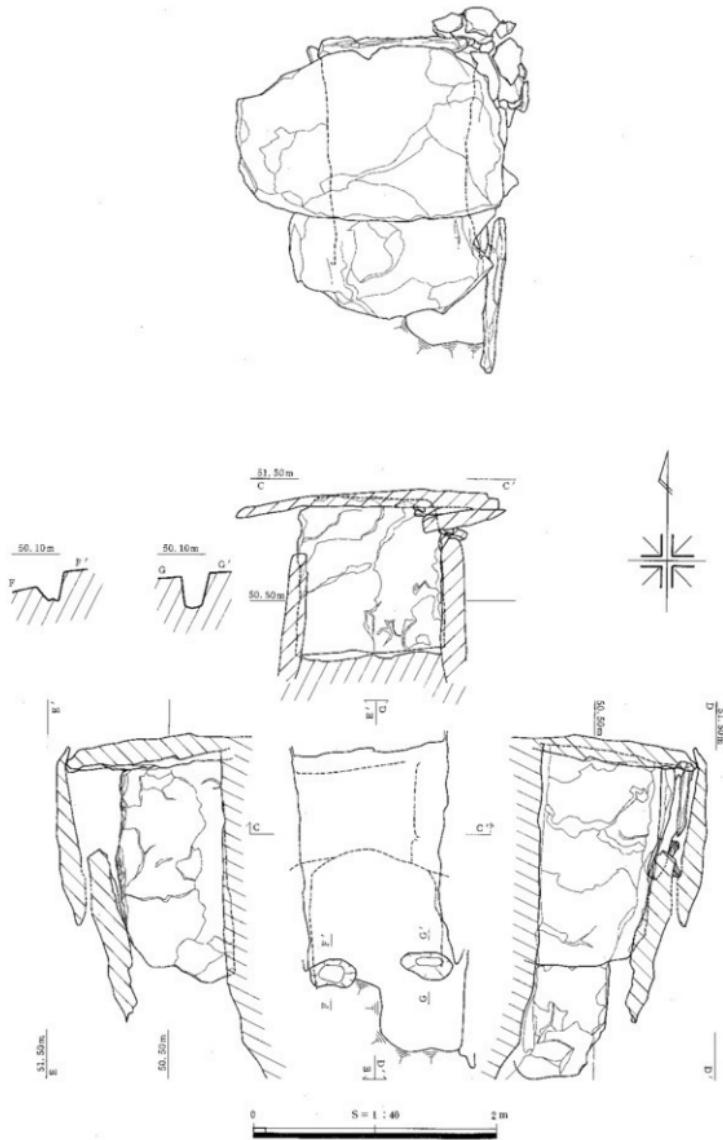
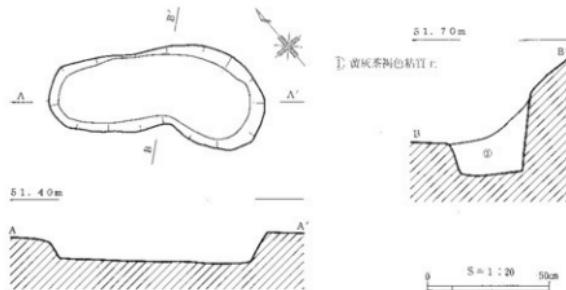


図16 長谷7号墳石室実測図



插図17 SK 1実測図

4 付隨する遺構 (SK 1) (插図17)

石室北東側の周溝底部で、土坑を1基検出した。SK 1である。長径90cm、短径31cm、周溝底からの深さ13cmを測り、不整な橢円形状を呈する。規模、形態、位置等から推して、古墳の副次的な主体部とも思われる。遺物は出土していない。

第6節 小結

長谷1号墳、7号墳の主体部は、いわゆる扁平板石組石室と呼ばれるもので、東伯耆地方の横穴式石室分類におけるC類石室に該当するものである（註6）。天神川下流域、東郷池周辺、三徳川流域に広く分布するものであり、このタイプの石室が、これら地域一円に浸透するのは、TK209併行期以降のこととされ、さらに、旧因幡国気多郡まで分布域を拡張するのは、TK217併行期のことと考えられている（註6）。

石室構築技術の広がりを政治勢力との関わりでみれば、C類石室を構築する古墳は、すなわち天神川流域を本拠とし、向山6号墳などの卓越した古墳を築造した中枢勢力の影響下にあるものとも解される。つまり、長谷古墳群へのC類石室の採用は、この中枢勢力の旧因幡郡内への影響力の行使の表象として受けとめられる。一方で、C類石室の分布が板状安山岩の産出域にはば重なることから、石室構築技術が石材調達という案件によって規制されたことの表れにすぎないとも解釈し得る。けだしC類石室の分布は、当時の政治勢力圏に直接重ねられない可能性も考えられる。

C類石室は、その分布域内で豊富に産出される大型の板状安山岩を壁材として使用するもので、壁面はほぼ垂直で、玄門石を立てるものが多く、玄室の壁体構成や玄門石の構造によって細分されている。玄室比は1.0～1.5前後で、平面プランは方形または略方形を呈する。

長谷1号墳は奥壁に大型の1枚石を使用し、側壁も、ごくわずかに石材を捕うものの、大型石材の1枚使用といえるものである。玄門石は櫛石を架高せず、直接天井石が乗っており、玄室比は1.1で、C 3類に細分されるものである。一方7号墳は、奥壁に大型の1枚石を使用し、側壁にも大型の1枚石を使用するものの、一部に板石を小口積みするものである。玄門石は、櫛石を架構せず、直接天井石が乗るものと思われるが、遺存していない。玄室比は1.4を示し、C 2類に細分されるものである。1号墳と7号墳の壁体構成の違いは、側壁基底石上に石材を補足する度合いの差であり、基本的に両者は、同じ構造の石室であるといえる。ただし、石材補足の程度の差が時期差を示す可能性が指摘されており、C 2類→C 3類の流れが推察されている（註6）。つまり、7号墳から1号墳への変遷が考えられるのである。

遺物は、長谷1号墳からのみ検出された。玄室と羨道部を合わせて、須恵器17点、土師器5点、耳環1点であ

る。須恵器は、坏蓋7点、坏身5点、高台付き坏1点、長頸壺1点、短頸壺1点、不明壺1点、甕1点の構成である。漢道部や玄室内の遺物出土状況には、プライマリーな状況が窺えず、副葬品の厳密な構成は明らかにできない。蓋杯については、蓋の天井部と体部の間の稜が完全に消失していること、坏身の立ち上がりが低平で矮小であること、蓋、身とも、天井部、底部のヘラ切り後の調整が極めて粗雑であり、無調整に近いことから、すべてTK217並行期の所産と考えられる。これは、上述したC類石室の年代観と矛盾せず、石室の変遷案を補完するものとなろう。

高台付き坏（挿図IIのPo4）については、8世紀後葉に比定されるものであり、他の須恵器と大幅な時間差が認められるものの、追葬行為の可能性は否定できない。あるいは、挿図10のPo23の土師器甕も含めて、SK1の人骨に本来伴うものであった可能性にも留意する必要があろう。

註1 長谷7号墳は、平成7年度に青谷町教育委員会によって試掘調査が行われており、後背周溝が確認されている。

青谷町教育委員会『青谷町内遺跡発掘調査報告書VI』1997

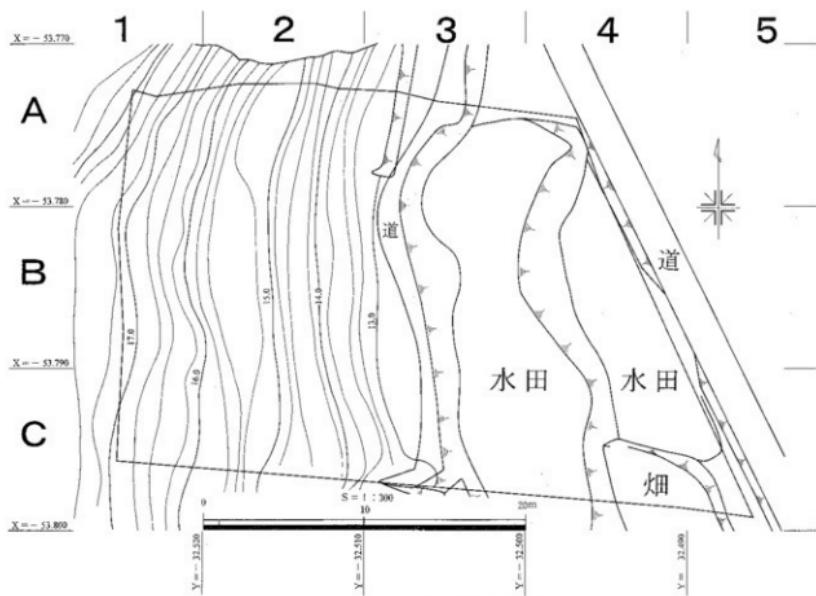
註2 青谷町教育委員会森佳樹氏のご教示による。

註3 石材については、赤木三郎先生にご鑑定いただいた。

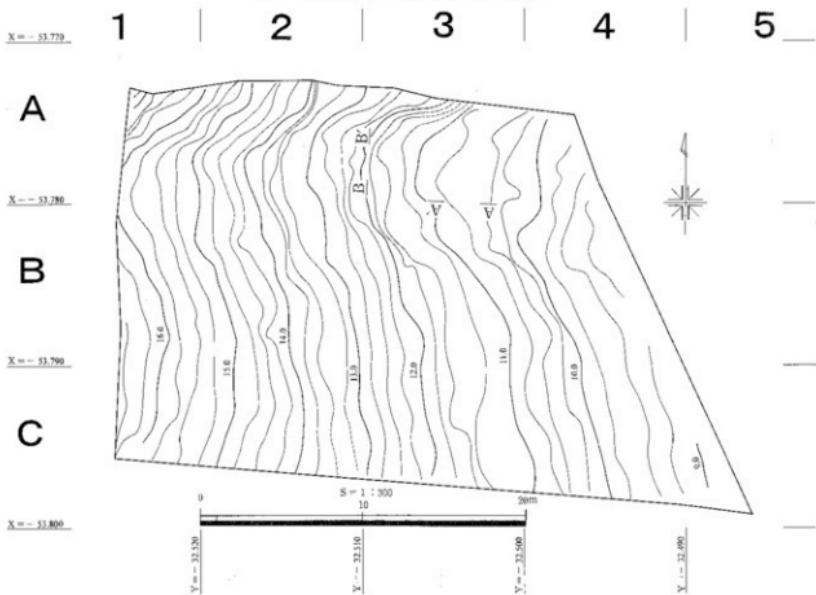
註4 石室の左右は、奥壁に向かっての左右である。以下これに従う。

註5 人骨については、鳥取大学医学部井上貴央先生にご教示いただいた。

註6 牧本哲雄「地域型横穴式石室とその背景－東伯耆地方を例にして－」『地域に根ざして－田中義昭先生退官記念文集』1999



挿図18 長和瀬谷田遺跡調査前地形測量図



挿図19 長和瀬谷田遺跡調査後地形測量図

第4章 長和瀬谷田遺跡の調査

第1節 調査の概要

調査地は北から南の日本海に向けて延びる尾根の東斜面に位置する。現況では調査地の東側低位部は水田となっており、西側高位部は竹の繁茂する荒れ地となっていた。近年まで梨の栽培が行われていたが、栽培を止めからは利用されることなく放置されていたという。水田部は東側に盛り土による農道があるため湧水の自然排水が阻害され、尾根から染み出す湧水が谷状地形の中心部の調査地部分に集中するために地盤が軟弱であり、夏でも乾燥することは無かったという。

試掘調査時に出土した須恵器に須恵器同士が融着した痕跡が存在したことから、周囲に須恵器窯が存在する可能性が考えられ、須恵器窯ないし灰原の検出を第1の目的に調査に着手する事にした。重機による表土剥ぎの段階で、径が1mを越えるものを含む大きな礫が数多く存在することが明らかとなった。礫自体には加工された痕跡は存在しなかったが、水田下からまとめて出土したものについては軟弱な地盤改良を意図して人為的に埋められたものと推測される。

調査地内から遺構を確認することは出来なかったが、小規模な谷状部分の黒色系の埋土内を中心に主に古墳時代の土器類が出土した。この黒色系の埋土は調査地西側の標高が高い部分に比較的厚く堆積しており、高所側の調査地西側に由来することが推測される。遺物も多くが西側から出土している。

第2節 調査の経過と方法

長和瀬谷田遺跡では、平成7年度に青谷町教育委員会が実施した試掘調査によって、重ね焼きの痕跡が残る須恵器窯や窯塗と思われる小片が出土したことから周囲に須恵器窯の存在が推測されていたが、調査地には窯本体ではなく灰原などの窯に関連する遺構が存在することが予想された。調査予定面積は822m²であり、発掘調査期間は平成11年4月から6月末までの3ヶ月間であった。

発掘調査は、4月12日に開始した重機による表土剥ぎから始まった。剥土は調査地東側の農道を挟んだ道路用地部分に搬出した。20日からは作業員の稼働を始めた。表土剥ぎ終了後、業者に委託して国土土標第V系に対応するグリッドを設定するための方眼杭を設置した。調査地内には径が1mを越えるものを含む大きな円礫が多量に存在したうえ、湧水もあり掘り下げには困難が伴った。調査地に至る道路が悪くベルトコンベアが搬入できなかつたため、人力で排水土搬出を行ったが、湧水のため斜面が滑り困難を伴った。調査地内から遺構は検出できなかつたが、北側に位置した小規模な谷状部の埋土から土師器・須恵器が出土したため、ベルトを設定して掘り下げながら遺物の取り上げを実施した。須恵器には焼成不良なものが比較的多く、試掘調査で予測されていた須恵器窯が周囲に存在する可能性は高いものと考えられる。6月28日で調査を終了した。

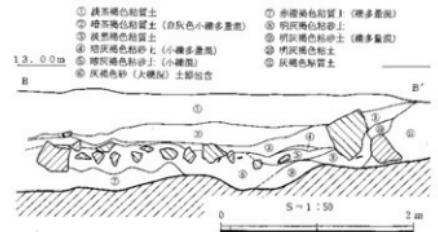


図20 谷状部南北土層断面図

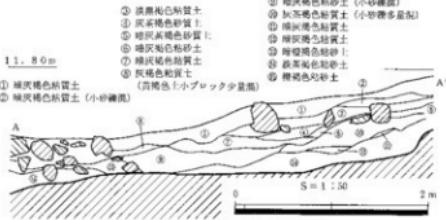


図21 谷状部東西土層断面図

第3節 遺構外の遺物

遺構外出土遺物（挿図22～27 図版9～12）

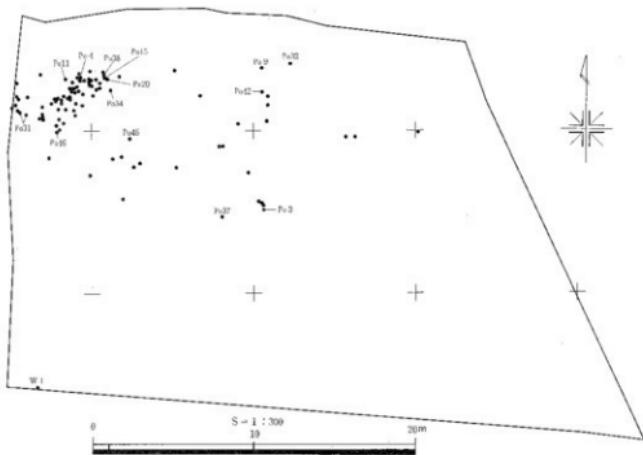
遺物は全て遺構外から出土したものである。図化出来たものには土器・土製品で弥生土器甕Po1、弥生土器底部Po2、土師器「く」字状口縁甕Po3～14、須恵器坏蓋Po15～21、坏身22～27、高台付坏Po28、大甕Po29、口縁部Po30・31、長頸甕Po32、壺Po33、（壺）胴部Po34、高环35～37、（提瓶）Po38、横瓶Po39、ヘラ記号をもつ須恵器Po40・41、土師質土器鍋Po42～45、高台付坏Po47、瓦質土器鍋Po48、青磁碗Po49、陶器灯明受皿Po50、土製品の土鍾Po51～59、石製品では管玉S1、石鐵S2・3、磨石S4、敲石S5、木製品では漆器皿W1がある。

Po1は口縁端部が欠損しているため明確ではないが、弥生時代後期初頭の南谷大山Ⅰ期に該当すると考えられる。Po3～14はいずれも残存部分がわずかで時期の判断は困難であるが、古墳時代前期から中期のものであろう。須恵器では坏蓋Po15は稜がはつきりと残るもので、中村副年Ⅱ型式3段階に併行すると考えられる。しかし、口縁端部内面に段が存在せず、口径も小さく、疑問も残る。Po16は稜が無くなることからⅡ型式4段階、Po17～20はⅡ型式5段階、Po21は天井部からZ字に屈曲し、端部で下方に屈曲させて段をなすものでⅣ型式3段階、坏身Po22～27は立ち上がりが短く内傾し、端部を丸くするもので、Ⅱ型式4段階に併行すると考えられるが、Po22にはやや古い様相が認められる。Po32は肩の張らない球形に近い胴部を持つもので高台は無く、出雲5期に併行するものであろう。Po35は低脚無蓋高坏で、坏部の口縁端部はわずかに外反する古い要素が認められるが、脚端部は引き出されたように尖っており、透かしも存在せず、退化傾向を示す。出雲6期に併行するものであろう。Po44・45は口縁部が直線状で内面に横方向のハケ目が施される。勘柄氏の中世Ⅱ期に相当するもので、12世紀代の時期が与えられる。Po48は瓦質土器の崩れで、口縁部が「L」字状に屈曲して受け部状を呈する。口縁端部はナデにより凹線状に仕上げられている。勘柄氏中世Ⅲ期に相当し、13世紀の年代が与えられよう。Po49は玉鉢縁を呈する青磁碗である。Po50は皿の内面に環状の仕切りを設けたもので、内外面にオリーブ色の釉が施される。

S1は小形の管玉で、画面穿孔が施されている。

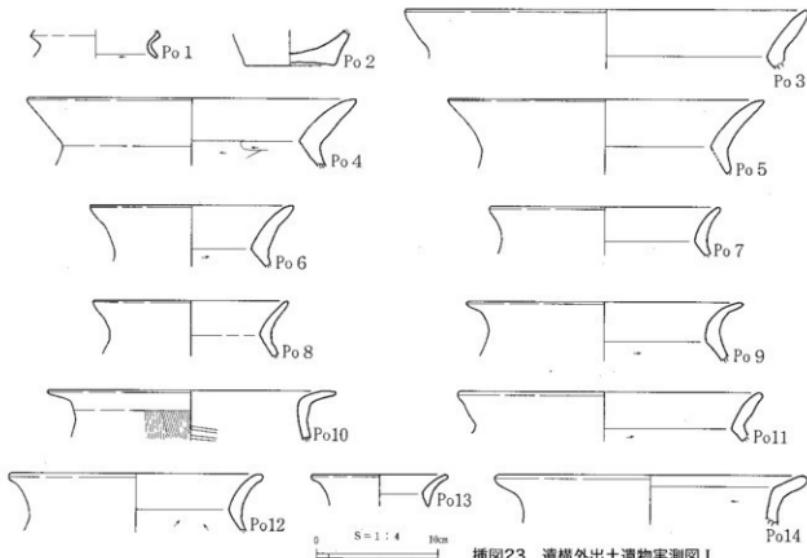
W1は調査地南西隅に排水用のトレンチを掘り下げ中に出土したもので、調査地内では遺構は認められなかつたが南側の調査地外に何らかの遺構が存在する可能性は否定できない。皿は内外面に赤漆が施されるが、文様は認められない。底

部には低い高台があり、高台内面には黒漆が施されているようである。内面底部には段を持つ。類似形態を呈する草戸千軒遺跡のS2550から出土した漆器は、草戸千軒Ⅲ期で内外面に黒漆を施すもので、内面底部に段を持つが口縁部がW1よりも直線的になる。これ



挿図22 遺物出土位置図

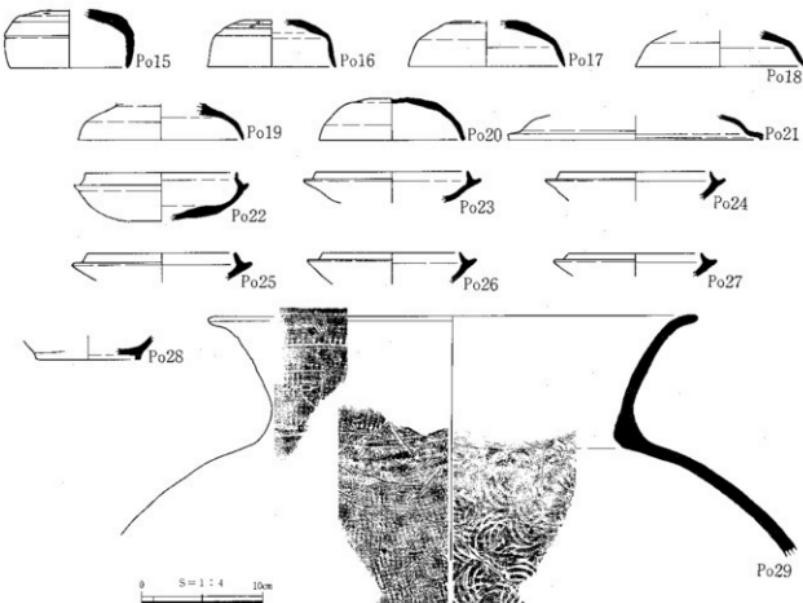
はやや新しい要素であり、W1はⅢ期でも古い段階に位置付けることが出来、草戸千軒の年代観から14世紀末から15世紀初頭頃のものと推測される。しかし、Ⅲ期の皿で確実に内外面に赤漆が施され全体形の判明するものは無いようである。W1をⅢ期の古い段階に位置付けることは漆器皿における彩色の開始時期の問題とも絡むため慎重に判断する必要があり、今後の資料の増加によっては時期を再検討することが必要となるかもしれない。



挿図23 遺構外出土遺物実測図

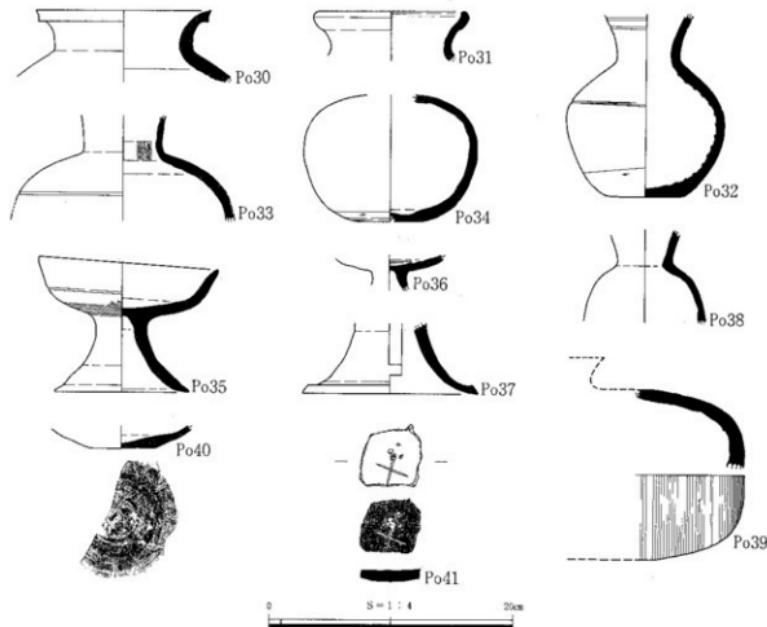
表22 遺構外出土器・土製品観察表

遺物番号 探査番号	表面 番号	遺物名	被 覆 層	法 量 (cm)	形態上の特徴 外表面調整	内 面 調 整	内面色調	外面色調	底 土 ・ 構 成	取 上 No.	実測者名
Po.1 22	9	谷状部	漆生 漆	①△10.1 ②△2.1	口縁部ヨコナデ、腹部アヌリカ?、風化のため調整不鮮明	にぶい穀色	にぶい黄褐色	やや密(1mm以下 の砂粒多量混入)・ やや小見	25	福田-13	
Po.2 22	9	谷状部	漆生 漆(底)	①△2.9 ②△7.6	風化のため調整不明	にぶい穀色	にぶい黄褐色	密(1~2mmの砂 粒混入)・良	23	清水-10	
Po.3 22	9	谷状部	土師器 裏	①△33.2 ②△4.9	風化のため調整不明	風化のため調整不明	淡黃色~暗褐色	密(底付多量混入) やや不足	57	房子-10	
Po.4 22	9	谷状部	土師器 裏	①△27.2 ②△5.6	ナデ	口縁部ナデ、腹部ケ ズリ	淡黃色~灰黃褐色	密(1~2mm大 きな砂粒混入)・良	93	清水-12	
Po.5 22	9	谷状部	土師器 裏	①△26.0 ②△6.1	ナデ	ナデ調整、底部ケ ズリ、風化のため調 整不鮮明	淡黃褐色	密(2~3mm程 度の砂粒多量混入) やや不足	8 38	房子-7	
Po.6 22	9	谷状部	土師器 裏	①△16.6 ②△5.1	全体に風化。ナデ	口縁部ナデ、体部ケ ズリ	にぶい穀色	密・良	54	西川-8	
Po.7 22	9	谷状部	土師器 裏	①△19.0 ②△4.1	ナデ	口縁部ナデ、体部風 化のため調整不鮮 明	淡黃色	にぶい黄褐色	密(砂粒多量混入) 良好	38	房子-8
Po.8 22	9	谷状部	土師器 裏	①△16.1 ②△4.7	ナデ	口縁部ナデ、体部風 化のため調整不鮮 明	にぶい穀色~灰黃 褐色	やや粗(1~2mm 程度の砂粒混入) やや不足	11	福田-20	
Po.9 22	9	谷状部	土師器 裏	①△22.8 ②△4.9	ナデ	口縁部ナデ、体部ケ ズリ	暗め灰褐色	粗めにぶ い穀色	密(砂粒多量混入) 良好	43	房子-6
Po.10 22	9	谷状部	土師器 裏	①△23.8 ②△4.1	口縁部ヨコナデ、腹 部ケズリカ?	口縁部ヨコナデ、体 部ケズリカ?	暗め灰褐色~ にぶい穀色	やや粗(1~2mm 程度の砂粒多量混入) ・良	11 45	福田-14	
Po.11 22	9	谷状部	土師器 裏	①△25.6 ②△4.1	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、体 部ケズリ	褐灰色	やや粗(1~3mm の砂粒多量混入) 良	84	西川-7	
Po.12 22	9	谷状部	土師器 裏	①△21.0 ②△4.7	工具による横ナデ	口縁部ナデ、体部ケ ズリ	にぶい黄色褐色	密(砂粒少量混入) 良好	11	西川-2	
Po.13 22	9	谷状部	土師器 裏	①△11.4 ②△2.7	風化のため調整不明	風化のため調整不明	淡黃色	密(2~3mmの砂 粒多量混入) やや不足	145	房子-4	
Po.14 22	9	谷状部	土師器 裏	①△25.8 ②△4.1	不明瞭だがナデか?	口縁部ナデ、体部ケ ズリ	淡黃褐色	やや粗(3mm程 度の砂粒多量混入) やや不足	145	房子-9	



挿図24 遺構外出土遺物実測図II

遺物番号 発掘番号	回転 番号	遺構名	種 類	量 (g)	形態上の特徴 表面調査	内 面 調 査	内面色調	外 面 色 調	胎 土 ・ 燒 成	取上 Vs	実測値 Na
Po15 23	9	谷状部	須恵器 縦身	① 9.6 ② △4.8	口縁回転ナデ、天井部回転ナデ、天井部切妻ナデ	口縁回転ナデ、天井部切妻ナデ	灰白色	密・良好	81	西川-5	
Po16 23	9	谷状部	須恵器 縦身	① 10.6 ② 3.9	口縁回転ナデ、天井部切妻ナデ、天井部切妻ナデ	口縁回転ナデ、天井部切妻ナデ	灰色	密・良好	24	清水-6	
Po17 23	10	谷状部	須恵器 縦身	① 12.9 ② △3.8	口縁回転ナデ、天井部回転ナデ、天井部切妻ナデ	口縁回転ナデ、天井部切妻ナデ	灰白色	密・良好	45	西川-6	
Po18 23	9	谷状部	須恵器 縦身	① 14.0 ② △3.0	口縁回転ナデ、天井部回転ナデ、天井部切妻ナデ	口縁回転ナデ、天井部切妻ナデ	灰白色～黃 灰色	密・良好	19	清水-4	
Po19 23	9	谷状部	須恵器 縦身	① 13.7 ② △3.0	口縁回転ナデ、天井部切妻ナデ	口縁回転ナデ	灰色	密・良好	29	野島-1	
Po20 23	9	谷状部	須恵器 縦身	① 12.0 ② △3.5	天井部に板目底、難 行者ため不明瞭、難 行者ため不明瞭	口縁回転ナデ、天井 部切妻ナデ	灰白色	密・良好	83	西子-1	
Po21 23	9	谷状部	土器器 縦身	① 21.0 ② △2.0	口縫ナデ、口縫端部 アラブナデあり	口縫ナデ	灰色	青灰色	108 128	西子-5	
Po22 23	10	谷状部	須恵器 縦身	① 12.6 ② △4.0	口縁回転ナデ、底 部切妻ナデ、底部 切妻ナデ	口縁回転ナデ、底 部切妻ナデ	灰色	密・良好	11 38 45	清水-2	
Po23 23	9	谷状部	須恵器 縦身	① 12.5 ② △2.5	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密・良好	108	福田-12	
Po24 23	9	谷状部	須恵器 縦身	① 12.4 ② △2.4	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密(砂粒少量混) ・良	45	福田-10	
Po25 23	9	谷状部	須恵器 縦身	① 12.2 ② △2.3	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密(砂粒混) ・良好	23	福田-11	
Po26 23	9	谷状部	須恵器 縦身	① 11.4 ② △2.6	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密・良好	44	野島-3	
Po27 23	9	谷状部	須恵器 縦身	① 10.9 ② △1.9	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密(砂粒混) ・良好	17	福田-9	
Po28 23	9	谷状部	須恵器 縦身	② △2.0	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色	密・良好	108	西子-2	
Po29 23	10	谷状部	須恵器 縦身	① 40.4 ② 19.9	口縫部平行タタキ後 壁面にナデ削し 体部棒子状斜タタキ	口縫部T工具による回 転ナデ、体部棒子状斜 タタキ	灰色	灰青 灰褐色	14 20 26 30 36 41 42	清水-15	



挿図25 遺構外出土遺物実測図II

遺物番号 群分番号	団版 番号	遺構名	種類	法 量 (cm)	形態上の特徴 外観調査	内面調査	内面色調	外面色調	胎土・焼成	取上№	実測者№
Po30 24	11	谷状部	須磨器 壺?	① △14.4 ② △4.9	口縁部凹板ナデ。刃部平行タスキ	口縁部凹板ナデ。刃部平行タスキ	灰色~黒灰色	暗灰褐色	密・良好(芯焼け)	27	清水-8
Po31 24	9	谷状部	須磨器 壺?	① △12.0 ③ △4.1	凹板ナデ	口縁部凹板ナデ。表面焼成度のため剥離不規則	灰白色	暗褐色	密・やや不良	106 128 139 145	西川-3
Po32 24	10	谷状部	須磨器 壺?	② △14.9 ③ 6.3 ④ 13.1	口縁部凹板ナデ。刃部平行タスキ。表面焼成度のため剥離不規則	口縁部凹板ナデ。刃部平行タスキ。表面焼成度のため剥離不規則	灰白色~黑色	暗褐色~暗褐色	密(2~3mmの大粒砂多量混入)・上半不良 下半不良	16	清水-3
Po33 24	9	谷状部	須磨器 壺?	② △8.6	底部に1条の沈線。 凹板ナデ	口縁部凹板ナデ。刃部平行タスキ。表面焼成度のため剥離不規則による剥離の跡などナデ	灰白色	暗・良好	8 11	清水-7	
Po34 24	10	谷状部	須磨器 壺?	② △10.5 ③ △14.3	刃部凹板ナデ。底面 凹板ナデ(ラスナ)	刃部凹板ナデ	暗灰褐色	暗褐色	11 20 38 45 100	西川-3	
Po35 24	12	谷状部	須磨器 高环	① △15.0 ② △11.1 ③ △11.2	耳底部カキ目。他は 凹板ナデ	耳底部不能方向のナデ。 底は凹板ナデ	灰色	暗・良好	25 50	清水-1	
Po36 24	11	谷状部	須磨器 高环	② △2.9	凹板ナデ	外部工具による凹板 凹板ナデか?	浅黄色	暗(1mm程度の砂 粒混入)・やや不良	12	福田-21	
Po37 24		谷状部	須磨器 高环陶器	② △5.8 ③ △14.5	側面に方形透孔なし。 凹板ナデ	凹板ナデ	灰色	暗(1mmの砂粒 混入)・良好	58	野島-2	
Po38 24	11	谷状部	須磨器 高环	② △7.6	凹板ナデ	凹板ナデ	灰色	密・良好	82 105	清水-9	
Po39 24	11	谷状部	須磨器 高环?	② △14.0	カキ目	底面凹板ナデ。底面 凹板ナデ(ラスナ)	灰色	密・良好	11 45	清水-11	
Po40 24	11	谷状部	須磨器 高环	② △1.9	腹面に「X」状のヘ ルム。底面凹板ナデ 凹板ナデ(ラスナ) アーチ	底面凹板ナデ。底面 凹板ナデ(ラスナ) アーチ	灰色	密・良好	27 29	清水-5	
Po41 24	11	谷状部	須磨器	⑤ △4.6 ⑥ △4.9	小笠方向のケズリ	「X」状のヘラ記号。 ナデ	灰白色	密・良好	30	附子-15	

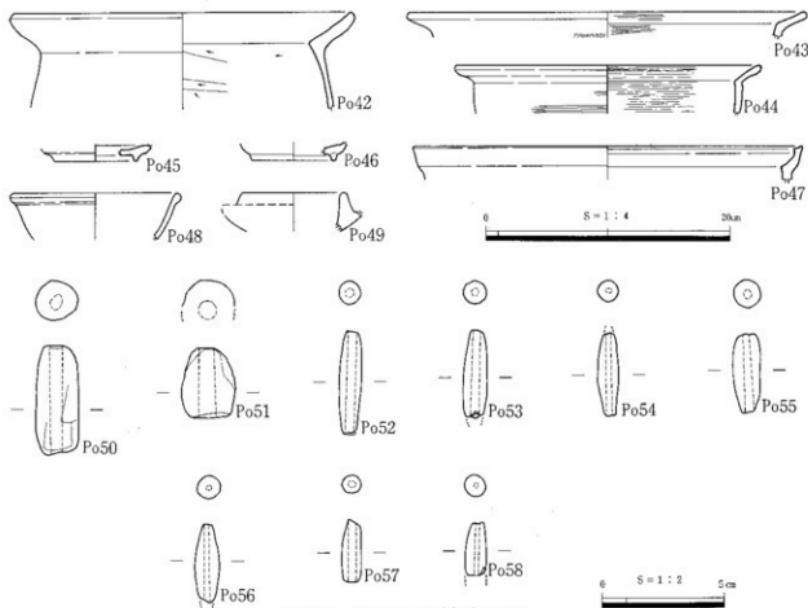
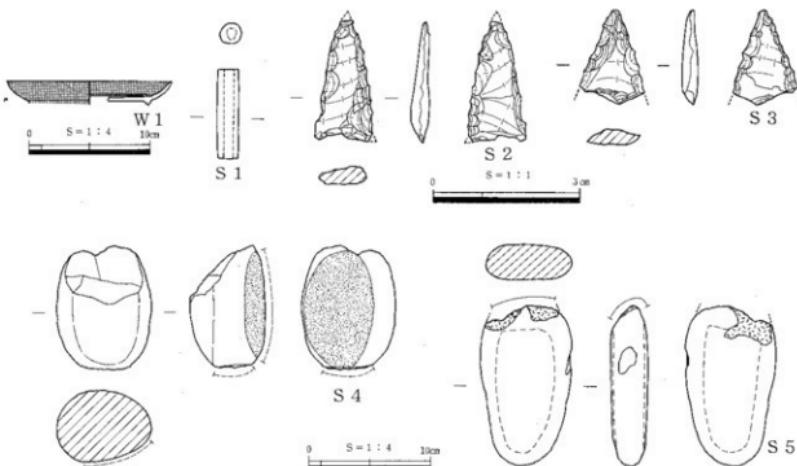


図26 遺構外出土遺物実測図IV

遺物番号	回収番号	遺構名	種類	形質	法 量 (cm)	形態上の特徴 外面剥離	内面調査	内面色調	外面色調	着土・焼成	取上№	実測着地
Po42 25	11	谷状部	土壌器 皿	①△27.8 ②△8.0	横ナギ、外面にスス 多量に付着	口縁部ヨコナデ。体 部タマリケ	口縁部ヨコナデ。体 部タマリケ	褐色	青・良好	20 44	14	清水-14
Po43 25	11	谷状部	土壌器 皿	①△32.8 ②△2.1	口縁部ヨコナデ。頭 部ヨコナデ	口縁部ヨコハケ後部 いナギ消し。底部ヨ コハケ	口縁部ヨコハケ後部 いナギ消し。体部ヨ コハケ	青(1mm以下) 褐色	青(1mm以下) 褐色	49	野島-6	
Po44 25	11	谷状部	壺 瓶	①△25.4 ②△4.0	口縁部ヨコナデ。頭 部ヨコナデ	口縁部ヨコハケ後部 いナギ消し。体部ヨ コハケ	口縁部ヨコハケ後部 いナギ消し。体部ヨ コハケ	青(2mm以下) 褐色	青(2mm以下) 褐色	27	田子-14	
Po45 25	11	谷状部	土壌器 皿	②△1.4	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	青(2mm以下) 褐色	104 107	福田-17	
Po46 25	11	谷状部	土壌器 皿	②△1.6	高台ナデ。	ナデ	ナデ	褐色	青(2mm以下) 褐色	117	福田-15	
Po47 25	11	谷状部	瓦片	①△32.0 ②△2.9	口縁部ヨコナデ。頭 部ヨコハケ後部くび ヨコナデ	口縁部ヨコナデ。頭 部ヨコハケ後部くび ヨコナデ	口縁部ヨコハケ後部 いナギ消し。体部ヨ コハケ	灰褐色	青(砂利混) 褐色	35	西川-4	
Po48 25	11	谷状部	罐 瓶	①△14.2 ②△3.3	船	船	船	各緑灰色	濃密・良	30	田子-13	
Po49 25	11	谷状部	罐 火口瓶	①△8.7 ②△3.3	船	船	船	オリーブ褐色	濃密・良	26	田子-12	
Po50 25	12	谷状部	土器品 土罐	⑥△4.5 ⑦△1.8	丁具によるミガキ状 のナデあり、底底あ り	丁具によるミガキ状 のナデあり、底底あ り	丁具によるミガキ状 のナデあり、底底あ り	青(青褐色) 褐色	青(青褐色) 褐色	27	福田-2	
Po51 25	12	谷状部	土器品 土罐	⑥△2.9 ⑦△2.2	ナデ。手捏ね状底部 さえあり	ナデ。手捏ね状底部 さえあり	ナデ。手捏ね状底部 さえあり	青(青褐色) 褐色	青(青褐色) 褐色	5	福田-1	
Po52 25	12	谷状部	土器品 土罐	⑥△4.3 ⑦△0.55	黒斑あり。端部わざ かに火候あり	黒斑あり。端部わざ かに火候あり	黒斑あり。端部わざ かに火候あり	青(青褐色) 褐色	青(青褐色) 褐色	107	福田-5	
Po53 25	12	谷状部	土器品 土罐	⑥△3.6 ⑦△1.0	端部わざかに欠損あ り	端部わざかに欠損あ り	端部わざかに欠損あ り	灰褐色	良好	27	福田-6	
Po54 25	12	谷状部	土器品 土罐	⑥△3.6 ⑦△0.9	端部わざかに欠損あ り	端部わざかに欠損あ り	端部わざかに欠損あ り	青(青褐色) 褐色	良好	22	福田-4	
Po55 25	12	谷状部	土器品 土罐	⑥△3.95 ⑦△1.2	端部わざかに欠損あ り	端部わざかに欠損あ り	端部わざかに欠損あ り	青(青褐色) 褐色	良好	52	福田-7	



挿図27 遺構外出土遺物実測図V

遺物番号 押岡番号	図版 番号	遺構名	種類	法量 (cm)	形態上の特徴 外観調査	内面調査	内面色調	外面色調	胎土・焼成	取上№	実測者№
Po56 25	12	谷状部	土製品 土器	⑥△3.2 △1.0 △1.0	ナメ、端部に欠損あり		暗赤褐色	やや不良	22	福田-3	
Po57 25	12	谷状部	土製品 土器	⑦△2.6 △0.8 △0.8	全体に風化あり		淡褐色～にぶい橙色		7	福田-18	
Po58 25	12	谷状部	土製品 土器	⑥△2.2 △0.9 △0.9	全体に風化あり		橙色		15	福田-19	

挿表3 遺構外出土石製品観察表

遺物番号	押岡番号	図版番号	遺構名	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)	材質	取上№	備考	実測者№
S 1	27	12	谷状部	碧玉	1.9	0.5	0.5	0.2	0.7	碧玉	129		福田-8
S 2	27	12	谷状部	石鐵	△2.5	△1.2	0.4		△1.0	安山岩	39		野島-8
S 3	27	12	谷状部	石鐵	△1.9	△1.4	0.3		△0.8	安山岩	7		野島-7
S 4	27	12	谷状部	磨石	△10.2	△7.8	△5.9		△682	花崗岩	13		野島-4
S 5	27	12	谷状部	敲石	13.2	7.4	2.9		△439	石英安山岩	18		野島-5

挿表4 遺構外出土木製品観察表

遺物番号	押岡番号	図版番号	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	形態上の特徴	取上№	実測者№
W 1	27	12	遺構外	漆器	皿	△13.4	△1.9	△10.0	高台内は黒漆、他は赤漆。内面の底部と口縁部の堤に段を持つ。	33	福田-22

図 版



長谷 1 号墳・検出状況（南から）



長谷 1 号墳・石室検出状況（東から）

図版2

長谷1号墳



長谷1号墳・調査前遺存状況（東から）



長谷1号墳・羨道部遺物出土状況（南から）



長谷1号墳・羨道部遺物出土状況（南東から）



長谷1号墳・羨道部遺物出土状況（南西から）



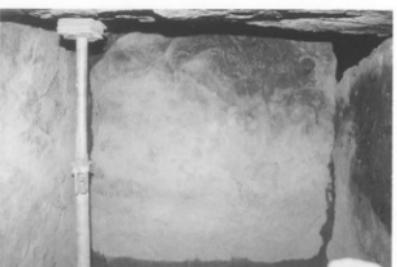
長谷1号墳・羨道部遺物出土状況（南から）



長谷1号墳・玄室内遺物出土状況（北東から）



長谷1号墳・玄室右側壁（南西から）



長谷1号墳・玄室奥壁（南から）



長谷 1 号墳出土遺物（1）
(Po 1～3—羨道部出土、Po 6～10玄室内出土)

図版4

長谷1号墳



Po11



Po12



Po13



Po14



Po4



Po5



Po15

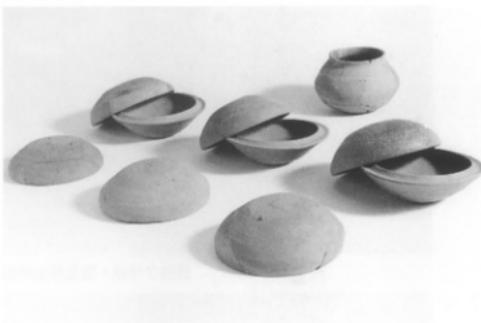


F17

長谷1号墳出土遺物（2）
(Po4・5—羨道部出土、Po11～15・F17玄室内出土)



長谷 1 号墳・羨道部出土須恵器



長谷 1 号墳・玄室内出土須恵器



Po19



Po21



Po23



S X 1 出土遺物

図版6

長谷7号墳



長谷7号墳・墳丘検出状況（南から）



長谷7号墳・墳丘検出状況（西から）



長谷 7号墳・調査前遺存状況（南から）



長谷 7号墳・墳丘東側土層断面（南から）



長谷 7号墳・石室検出状況（南から）



長谷 7号墳・石室検出状況（南東から）



長谷 7号墳・石室検出状況（南西から）



SK1・完掘状況（南から）

図版8

長和瀬谷田遺跡



調査前状況（空撮）（東より）



調査前状況（東より）



谷状部掘り下げ状況（東より）



調査地掘り下げ状況（東より）



谷状部南北断面（東より）



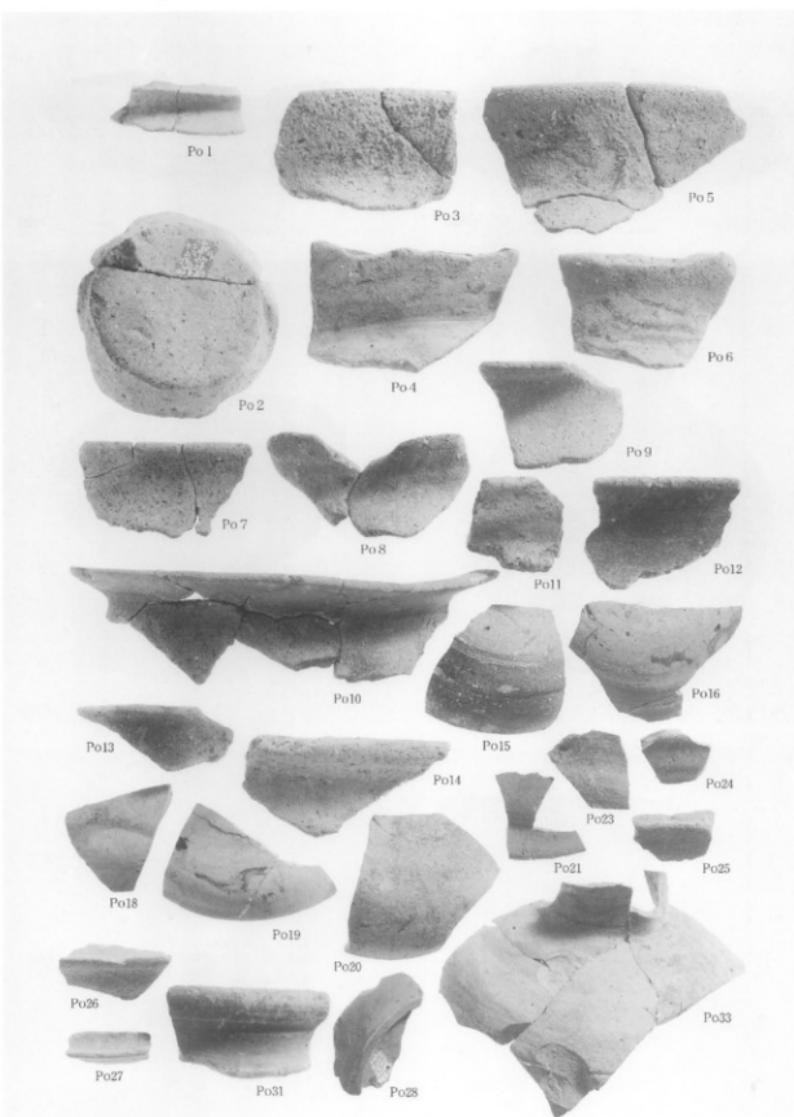
谷状部東西断面（北より）



遺物（Po32）出土状況（西より）



作業風景（東より）



長和瀬谷田遺跡出土遺物 1



Po17



Po22



Po32

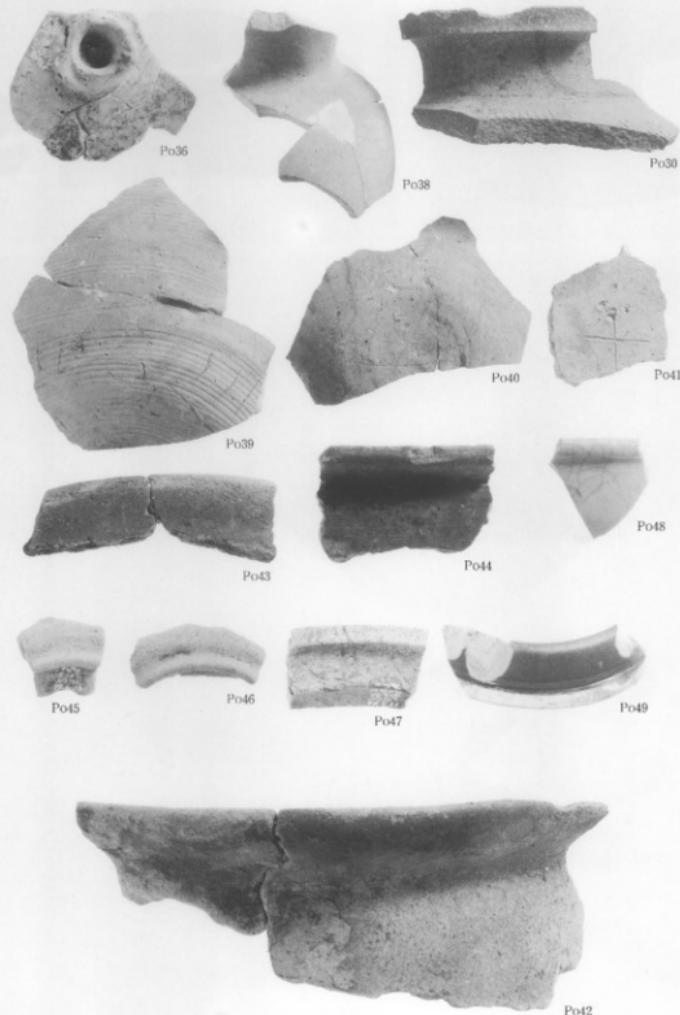


Po34

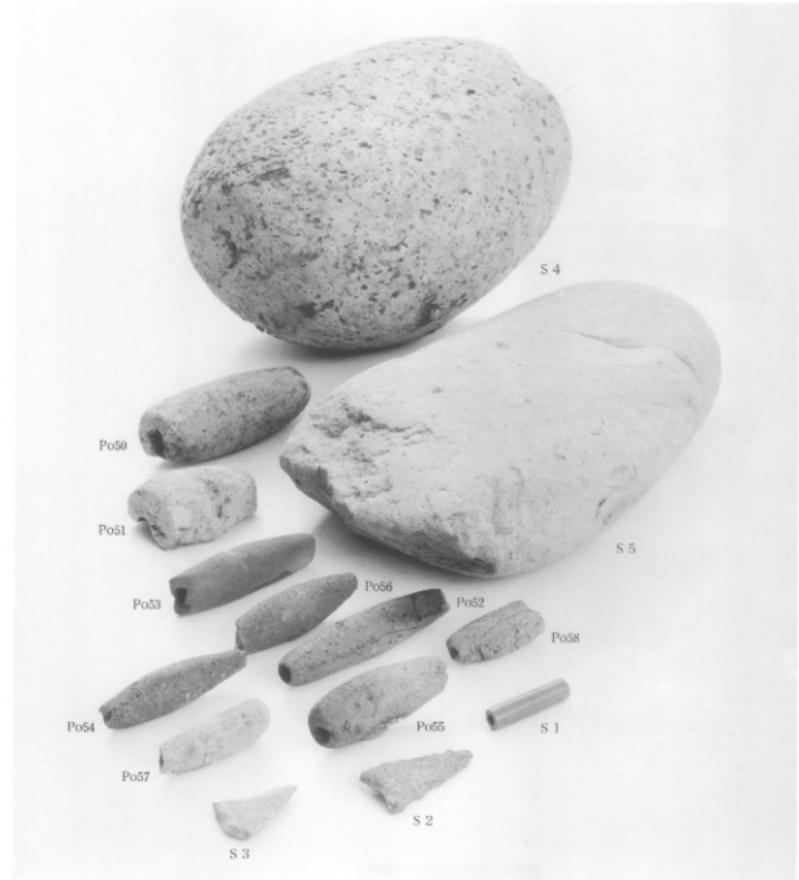


Po29

長和瀬谷田遺跡出土遺物 2



長和瀬谷田遺跡出土遺物3



長和瀬谷田遺跡出土遺物4

報告書抄録

ふりがな	ながたにこふんぐん なごうせたにだいせき							
書名	長谷古墳群 長和瀬谷田遺跡							
副書名	一般国道9号(青谷・羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	V							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	66							
編著者名	北浦弘人 鬼頭紀子(平成10年度) 西川徹 手島尚樹(平成11年度)							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260番地 TEL(0857)27-6711							
発行年月日	西暦2000(平成12)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	市町村	遺跡番号						
長谷1号墳	鳥取県気高郡 青谷町長和瀬 字石ケ丘592-6	31343	1-349	35度 30分 45秒	133度 58分 47秒	19981028 ~ 19981209	687	一般国道9号 (青谷・羽合道 路)改築工事
長谷7号墳	鳥取県気高郡 青谷町長和瀬 字上水無瀬975-1	31343	1-355	35度 30分 47秒	133度 58分 46秒			
長和瀬谷田遺跡	鳥取県気高郡 青谷町長和瀬 字谷田240-4	31343	1-365	35度 30分 53秒	133度 58分 29秒	19990407 ~ 19990628	782	一般国道9号 (青谷・羽合道 路)改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長谷1号墳	古墳 その他の 墳墓	古墳時代 古代	横穴式石室 古墓	須恵器 土師器 耳環 人骨				
長谷7号墳	古墳	古墳時代	横穴式石室 土坑					
長和瀬谷田遺跡	包含層	古墳時代		土師器 須恵器				

鳥取県教育文化財団調査報告書66

一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V

鳥取県気高郡青谷町

長 谷 古 墳 群
長 和 瀬 谷 田 遺 跡

発 行 2000年3月31日

編 集 財団法人 鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260番地

電話 (0857)27-6711

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印 刷 山本印刷株式会社